ネギまに転生！？

aaa-a・a-aa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ネギまに転生!?

【Ｎコード】
Ｎ１９６４Ｕ

【作者名】
ａａａ－ａ・ａ－ａａ

【あらすじ】
神様に間違えて殺された訳でもなく、トラックに轢かれて死んだ訳でもない。気がついたら赤ん坊に転生していた。

プロローグ（前書き）

なろうに初投稿になります。
駄文ですがよろしくおねがいします。

プロローグ

ｓｉｄｅ？？？

目を覚ますと自分は赤ん坊になっていた。

「生まれました。元気な男の子ですよ！」

いやなんで？
なんでいきなり赤ん坊になってるの？
だってつい昨日まで……、
うん？

おかしいな、昨日のことなのにまるで思い出せない。

あれちょっと待て、俺の名前……なんだっけ？

俺の頭は終始混乱状態だった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

俺が生まれてから一週間たった。

どうやら俺は二次創作でよくある転生と言う物
を体験したらしい。

自分がなぜこんな状況下にいるのか
分からない事だらけだが、
なんとか頑張っていくしかない。

そう思い俺は眠りについた。

プロローグ（後書き）

み、短い…。

新たな人生

ｓｉｄｅ？？？

俺が赤ん坊になって3年がたった。
親から新しく
天野京介という名前を付けられて育ってきた。
この3年間で前世の記憶もほとんど思い出した。
最初の頃は記憶がうまく思い出せずほとんど
普通の赤ん坊の頭だった。

どうやら最初体にあったのはいわば
自分の魂のような物なのだろう。

最初の頃に記憶がうまく思い出せなかったのは
生まれたての赤ん坊の脳では今まで生きてきた
記憶と知識を使うには容量が小さすぎた。

成長していくにつれて
最初に宿った魂から記憶が少しずつ
思い出していったんじゃないかと思っている。

記憶についてはさておき、
なぜ自分がこんな事になっているかが分からない。

別に神に会った訳でもなく、
トラックに轢かれた訳でもないし、
ましてや死んですらいない……はず！

ただいつもどうりに布団に入って寝ただけのはず。
まだ思い出していないだけかもしれないが、
今のところ心当たりはない。

そして１番重要なのが
この世界がどんな世界なのか分からない事だ。

一応前いた世界と大して変わらない現代日本のようで、
今は西暦１９８９年である。

文化もたいした違いもないようである。
もし仮にここがバトル漫画などの世界だったら早めに
把握してこれからどう行動していくか考えなければならない。

もしストーリーに巻き込まれる可能性を考えれば
準備しておくに越したことはないだろう。

まだ３歳児だというのにやることは随分多そうだ。

多少の不安もあるが、
この世界の新たな生活に期待するのであった。

超・占事略決

ｓｉｄｅ京介

「まったくこの倉庫どんだけ物詰め込んでんだよ」

現在大晦日の大掃除の真っ最中である。

この世界の情報はどうしたって？

実はあれから何の進展もないまま

１年が経ってしまった。

考えてみればたかだか3歳の餓鬼が

パソコンで情報収集するなどありえない訳で、

親に頼んで使わせてもらおうとしても、

「何を調べるの？」

と聞かれては何も出来ないので

碌に調べることが出来なかった。

仕方なく情報収集は気長にやることにして

今では普通に過ごしている。

「京介ー、倉庫の整理が終わったら休憩していいわよー」

「はーい」

と元気良く返したものの、
まったく終わる気配がねーな。

「色々しまいすぎだろコレ、
使わなくなったダイエット器具だの、
通販で買ったような商品ばっかじゃねえか。
未開封がほとんどだし、使わねえなら
買うなっつーの。
衝動買いばっかして……、うん？なんだこれ？」

大量の未開封のダンボールが転がっているなか
一つだけ場違いな古ぼけた箱がある。

「随分古いな。
まさかこれも通販の品ってことは
ないだろうし…、ちょっと開けてみっか！」

多少中身に期待しつつ開けてみると
そこには……

「さ～て中身は、は？」

箱の中身を見て固まってしまった、
そこにあったのは箱と同じくらい古そうな
１冊の本だった。

そこまではよかった。
だが問題はその本のタイトルだ。

「なんで、なんで、
超・占事略決がここにあるんだあああああ
ああああああああああああああああああ！！！」

掃除が終わった後、両親に超・占事略決の事について訪ねてみたところ
我が家のご先祖様は呪術師の家系だったそうで、
その初代が残した物らしいが次第に呪術師の血が薄れ
最後に呪術師として活躍したのは祖父の代までらしい。

「じゃあご先祖様はみんなこの本に書かれている事ができたの？」

「いいや。その超・占事略決をつかえたのは初代ただ1人だけらしい。
なんでも他の術と比べると独特すぎてどんな概念なのか理解できる人は
いなかったそうだ。おまえも一族の血を少しだけ引いているから案外
できちゃったりするかもな。アッハッハッハッハ」

なにげに初めて喋ったな父……、
とにかくこれでこの世界に異能があるとわかったな。

とにかくこれを読んでみよう。

結構好きだったんだよなシャーマンキング。
ＯＳとか実際にやってみたいし。
今日からしばらく部屋にこもることになるだろう。
「さてなになに降魔調伏、式神の作成法、巫門遁甲、
巫門御霊会、三日月ノ祓か、さすがに呪禁存思や禁人呪殺は
載ってないみたいだな」
まあこれは当然だろう。
修得が難しいとはいえ蘇生術や魂の引き剥がしなんてものがあったら
世の中ひっくり返るし。
あと二段媒介や甲縛式Ｏ．Ｓも載っていなかった。
これはＯ．Ｓ自体から自力で発展させていけと言うことだろう。
そしてすべての項目に魔力又は気を使うと書いてあった、
つまりこの世界には魔力が存在するということになり、
魔法もかなりの確立で存在するという裏付けになる。
超・占事略決が原作と違って
必要なのは巫力ではなくなっていたり、
内容も違う物があった。
例えば三日月ノ祓、これはＯ．Ｓの強制解除だったのだが。
この世界に他にＯ．Ｓを使う者がいないせいか、
呪い等の解呪に変わっていた。

Ｏ．Ｓ自体も霊を使わず自分の魔力や気を
媒介に与えイメージすることで原作で使われていた
Ｏ．Ｓを再現できそうだった。

つまり原作と違い属性を明確なイメージさえあれば
炎や氷などの属性をいくつも使えるということになり
風属性武神魚翅や炎属性のスピリット・オブ・ソードなど
かなり応用が利く仕組みだった。

Ｏ．Ｓのイメージに関しては問題ない、
前世の記憶である程度知識もあり原作の見本もあるから大丈夫だろう。

こうして俺は超・占事略決を元にＯ．Ｓの勉強を進めていくことにした。

この世界（前書き）

相変わらず文章短い……。

この世界

ｓｉｄｅ京介

超・占事略決を手に入れ勉強を進めること早2年あれから陰陽師や風水などの
予備知識を集めて順調に進んでいる。

どうやら俺には超・占事略決を使える才があったようで
両親はなぜ使えるのか驚いていた。

そのうえ魔力と気の量はそこそこ多いらしく、
Ｏ．Ｓを作り上げるのに支障は無さそうだった。

前世では触れてすらいないジャンルだったのでこの学問は非常に面白く、
どんどん知識を広めていった。

今ではもう簡単な占いをしたり小さな術式を組んでみたりと
基本的な事なら割とうまくいっている。

と言ってもＯ．Ｓが使えるようになるのはまだまだ時間が
かかりそうである。

そのうえいざ使えるようになった時のために体を鍛えなくてはいけないので
O．Sはうまくいってなかった。

若干スランプ気味になってきたので
その事を相談してみたら

「なら京介。お前麻帆良学園に行かないか？」

と親から提案された。

ハイ？チョットマテ。
イマナントイッタ？
マホラ？

「えええええエエエエエエ絵得獲江柄枝画餌えエ！？」

麻帆良学園！？つーことは何、この世界ネギま！？
いやまて落ち着くんだ。
まだ確定した訳じゃない一応確認しておこう。

「え、えーとお父さん？麻帆良学園ていったいどんなとこ？」

「どんな？うーんそうだな一言で言えば学園都市で西洋魔術師が沢山居て……」

ＯＫ間違いないネギまＤＡ。
そういえば魔法と陰陽師のある現代日本が舞台なんてネギま位じゃねーか
なんで今まで気づかなかったんだろう？
ていうか西洋魔術師なんているなら先に教えるべきだろう。
くそ、もっと根掘り葉掘り質問しておくべきだった。

「おーい聞いてるかー？」

「ああ、うん聞いてる聞いてる」

父の声で現実に引き戻される。

「つまりだ麻帆良には魔法使い達の組織があるから色んな情報も手に入る。
おまけに図書館島という世界最大級の書庫だってある。
おまえの勉強している超・占事略決についての情報を記した文献もあるか
もしれない。私達ではおまえになにかを教えることは出来ないだろう。
だが麻帆良なら色々教えられる人もいるだろうからな。
どうだ？べつに悪い話ではないだろう？」

たしかに……。

一人で研究するのも限界が見えてきたとこだ。

いまだに他人の魔法等を一度も見たことがないし
そんな環境もいいかもしれない。

知り合いに誰も関係者がいないから
もし俺がO．Sを暴走させでもしたら
どうなるかわかったもんじゃない。

西洋魔術も見てみたいし……、
ただ懸念すべきは原作に関わるかもしれないってことなんだよなぁ。

関わったら死の危険は増すだろうし…。

……よし！決めた。
原作には無視して安全な場所で研究することにしよう。

多少関わる可能性を考慮してでも麻帆良に行くべきだろう。

万が一関わることになっても原作知識があれば
大体はなんとかなるだろう。

そしてなによりも、

俺は超・占事略決をマスターして、
自在にO．Sを使いこなしてみたいという好奇心がとても大きかった。

「分かった。俺、麻帆良に行くよ」

ここに俺の麻帆良行きが決定した。

麻帆良学園入学（前書き）

ようやく更新できた……。
これから大体週一更新になりそうです。

麻帆良学園入学

ｓｉｄｅ京介

この春、
俺は麻帆良学園初等部に入学した。

一応親は学園側に俺が魔法技術を学びたいということは
あらかじめ伝えてあるらしく、魔法生徒として入学することになった。
ただし、超・占事略決が使えるということは伝えてないそうだ。、
今まで誰一人として使うことの出来なかった技術を使えると知られたら
碌なことにならないだろうから教わるのは魔力コントロールなど基礎的
なことだけにして決してばれない様にしなさいと強く念を押された。

もしどこかから俺の情報が洩れて、何処かの馬鹿に目を付けられでもした
ら堪ったもんじゃないのでおとなしく従っておいた。

ただ俺に魔力と気のコントロールを教えてくれる先生が出張中らしく、
修行はその人が帰ってきてから始めるそうだ。

残念ながら図書館島はトラップもあるので中学生になるまで入れないようだった。
かなり惜しいが中学生になるまでやることは山ほどある。

そんなに焦る必要もないだろう。

そして入学式、
学園長からの話はまったく頭に入らなかった。
決して学園長の話が長すぎたからではない。
学園長の頭が長すぎたからだ。
あのサイズはありえないだろ！？
なんだよアレ、目測で３０ＣＭはあったぞ！？
ぶっちゃけ妖怪だと思ったのは俺だけじゃないはずだ。
なんで一般人から突っ込まれないんだろう？。

そんなこんなで麻帆良学園初等部に入学した俺は入学式を終え、教室で自己紹介をしていた。
名前順だから天野で俺が最初か。

「天野京介です。
好きなことは占いと武術です。
これからよろしくお願いします」

まあ小学生の自己紹介と言ったら大体こんな感じでいいはずだ。
これで普通の小学生、悪くても少し変わっているくらいにしか思わないだろう。
中身はもういい歳なのに小学生っぽく見せるのはかなり疲れる。
その上、周りの子の精神年齢に合わせて会話をしなくてはいけないので話す時も気をつけなければいけない。
転生者というのも楽じゃないな。
「京都から来ました、近衛木乃香いいます。
皆よろしゅう」

近衛木乃香の護衛の桜咲刹那はいないようだ。
たしか原作だと中学生になってから来るんだっけ？

「椎名桜子でーす。よろしくお願いしまーす」

「雪広あやかといいます。
よろしくおねがいしますわ」

はい、またも原作キャラ登場。
さすがに四人目はいない……よな？

これで原作キャラと同じクラスか…、
まあこちらから関わらなければなんの問題もない。

そして自己紹介もなにごともなく進んで……、

「ただの人間には興味ありません。この中に宇宙人、未来人、異世界人、超能力者がいたら
、あたしのところに来なさい。以上」

……、

「これから皆と仲良くしていきたいと思います……嘘だけど」

……うん？

「世界は平凡か？未来は退屈か？現実は適当か？安心しろ、それでも生きることは劇的だ！」

……なんだこれ？

「くかきけこかかきくけききこかかきくここくけけけこきくかくけけこかくけきかこけききくくくききかきくこくくけくこくくけくかきくこけくけくきくきこきかかか――――――――――――ッ！！」

……もうなにを言っているのかすら分からない。

つーかこいつら小一だろ！？
なんでこの歳でこんなにキャラ濃いんだよ！！

俺はどうやらすっかり忘れていた、ここは麻帆良学園。
世界各地から集められた奇人変人達の巣窟だということを！

３－Ａ以外の生徒も例外ではなかったということか……。

もうなんか多少大人びていようが変わっていようが全然目立たないんじゃないかとさえ思ってきた。
俺の演技は一体なんだったのだろう……。

異常な自己紹介が終わり、今日はもう帰ろうと思った時に声を掛けられた。
「なあなあ、さっき自己紹介で占い好きってゆーてたやろー。ウチも占い好きやねん。友達になってくれへん？」

向こうから来やがったあああぁぁぁぁ！？
最悪だ、原作では明日菜曰く占いのことになると目の色が変わるっていってたの忘れてたあああ！！
不味いっ、ここで下手な関わりを持ってしまうと原作に引きずり込まれる！！
うまいこと回避せねば！

このかがあらわれた！

どうする？

たたかう
さくせん
おどかす
にげる＜

きょうすけはにげだした！

「どこ行くん？」

しかしまわりこまれてしまった！

「なーなー友達になろー。ウチと友達になるのはいやなん？」

このかははんまーをつかって
おどしてきた！

「わ、わかった。わかったからその手にもってる
トンカチをしまってくれ（汗）」

きょうすけはおどしにくっした！

「うん。ウチ近衛木乃香！これからよろしゅうな」

きょうすけのともだちがひとりふえた！

こんなはずじゃなかったのに、
いきなり親しくなっちまった。
もうなるようになるしかないか……はぁ。

麻帆良学園入学（後書き）

今回のクラス分けについてですが、原作2巻の回想シーンを元につくりました。

転校生（前書き）

なんとかできたので投稿できた……。
前回と結構被ってるけどご勘弁を……。
戦闘シーンはもう暫くお待ちください。

転校生

ｓｉｄｅ木乃香

ウチは今おじいちゃんがおる麻帆良学園で入学式を受けとる。実家じゃせっちゃんくらいしか友達いいひんかったし、これから新しく友達作れるとええな～。

せっちゃん今頃どうしてるやろか？

入学式も終わって教室で自己紹介の時間や！
友達になれそうな人誰かおるかな？

「天野京介です。
好きなことは占いと武術です。
これからよろしくお願いします」

占いかぁ…、
ウチも占い好きやし話も合いそうや。
お父様も話の合う友達を作りなさいゆーてたし、
後で思い切って声掛けてみよ。
っと、次はウチの番や。

「京都から来ました、近衛木乃香いいます。
皆よろしゅう」

自己紹介も終わってこれから皆帰り支度してる。
なんや変な人多かったな～。
今までせっちゃん以外の同い年の子と話したことないから分れへんけど、ここじゃ普通なんかな？
せや！さっきの人は……あ！おった！

「なあなあ、さっき自己紹介で占い好きってゆーてたやろー。
ウチも占い好きやねん。友達になってくれへん？」
？なんや凄い驚いとる。いきなり声掛けたんは失敗やったんかな？
って帰ろうとしてる！？
逃がさへんえ！
「どこ行くん？」
話の途中で帰ろうとするなんて失礼やで。
「なーなー友達になろー。ウチと友達になるのはいやなん？」

ウチはトンカチを出してお願いしてみる。これをするとお父さまも大抵の事は聞いてくれるんや。

「わ、わかった。わかったからその手にもってるトンカチをしまってくれ（汗）」

「うん。ウチ近衛木乃香！これからよろしゅうな」

やった！小学生になって初めての友達や。これから仲良うなれたらええなぁ。

ｓｉｄｅ　京介

意図せず木乃香と友達になって１ヶ月が過ぎた。　今では俺以外の友達も出来たようで案外このクラスのなかでは数少ない普通の生徒である。木乃香占いの話に着いていける友達は俺位しか居ないので趣味の話は大抵は相手をしている。

こうして趣味の話ができるのは俺も木乃香しかいないのでその点は俺としても助かっている。

「そういえば京君しっとる？」

「なにを？」

「今日このクラスに転校生来るんやて」

「転校生？」

転校生ねぇ……、
この時期に転校生というのは確かに珍しいが特に興味はない。
しかし転校生か……何か忘れているような……。
そんな事を考えていたら先生が教室に入ってきた。
「はーい、今日は皆に新しいお友達を紹介しまーす」

転校生はツインテールで左右の瞳の色がそれぞれ違うオッドアイ、ってあれはもしや……。

「海外からきた、転校生の神楽坂明日菜ちゃんでーす。皆仲良くしてあげてね」

「はーい」

やっぱり神楽坂明日菜だったか……。

そういえば雪広がクラスに居るってことは、そのクラスに転校してくるってことじゃねーか。すっかり忘れてたわ。

そして休み時間。

「ちょっとアナタ、その態度と目つき、転校生のくせにちょっと生意気じゃないですこと？」

あ、いいんちょが喧嘩売ってる。ちなみにこの頃からすでにいいんちょはいいんちょだった。

「ガキ……」

ブチン！

あ、いいんちょが切れた……。

「何よぉー！あんたの方がガキでしょー。このチビ！！」

「……！それがガキだって言ってるんでしょ。…このバカ！」

「あーー、ケンカ始まったー」

「委員長に１０円！」

「転校生に５円！！」

「どっちもガキだろー、小一なんだから」

あーあーもう派手にやっちゃって……。

つーかお前ら小学生の内から賭けなんてするなよ。

てか先生も笑ってないで止めるべきだろ、教師としてそれはどうなんだ？

それにしても小一でこれだけ異常なのか、こいつらが中学生になったらどうなるのか想像もつかない。

普通の学校と違って新鮮で面白いが、それと同じくらい将来が心配になってくる。

俺も異常だから人のことは言えないけどな。

麻帆良は基本クラス替えはなしだとか言ってたな、この面子で今後六年間過ごしていくことになるのか……正直不安だ。

転校生（後書き）

その内落ち着いたら何かアンケートでも取りたいと思います。

修行（前書き）

皆さん作業中に何の音楽を聴いてますか？
この作品を書き出してから最近はＯｖｅｒ　Ｓｏｕｌ、Ｎｏｔｈｅｒｎ　ｌｉｇｈｔｓ、ｂｒａｖｅ　ｈｅａｒｔ　を聞いています。
シャーマンキングは神曲多いと思う。

修行

ｓｉｄｅ京介

明日菜が転校してきて一週間、
あれからというもの明日菜と委員長はいつも喧嘩ばかりしている。
毎日よく飽きないねぇ……。

学校生活が落ち着いてきた頃
学園長から呼び出された。

いつも思うけどなんで学園長室が女子校にあるんだろう？
爺の趣味か？

「失礼します」

相変わらず頭なげぇ……。
らくだのこぶには脂肪が入ってるらしいけど学園長の頭には魔力でも詰まっているのだろうか？
……ありえる。

「（何か失礼なこと考えられてる気がするのう……）
今日呼び出したのは、君の修行のことについてじゃ」

修行か……、確か教えてくれる魔法先生がまだ出張から帰ってないんだったな。

一体誰が教えてくれるんだ？

「確か君は魔力と気のコントロールが巧くいかず暴発しやすいと聞いておるが、実際どうなんじゃ？」

家の親そんな適当に説明したのかよ…。

まぁ、此処は話を合わせておいた方が良いだろう。

「はい、実はそうなんです」

「うむ。それなら飛びきり良い魔法先生がおる。　（コンコン）

おお、来たようじゃな。入っていいぞい」

「失礼します、学園長。　この子が例の子ですか？」

……キッチリ着こなしたスーツにメガネ、顎にヒゲを蓄えたこのダンディ過ぎる人はこの学園ではあの人しかいない……。

「そうじゃ、紹介しよう天野君。こちらが君の修行を見てくれる高畑・T・タカミチ君じゃ」

「学園長から話は聞いているよ、君が天野京介君か。これからよろしくね」

……なんでタカミチなんだよ！
なんで子供一人に大戦の英雄が出て来るんだよ！
どう考えてもおかしいだろうが！

「タカミチ君は魔力と気のコントロールに関しては、この学園で一番上手いから心配する事はないぞ」

どうやら俺が黙っている理由を勘違いしたらしい。
実力はもう知ってんだよ。俺の疑問はなんであんたが教えてくれるのかなんだよ！おそらくタカミチが教えてくれるのは、学園に魔力と気を両方使う人自体が居ないのだろう。後は曲がりなりにも教師だから後輩に教えてあげようという親切心のせいで断れなかったのだろう。あくまで推測だが。

にしてもまた原作キャラか……。
これ以上へたに関わりたくないんだが……、
態々親が頼んでるから断ることも出来ない。
こればっかりは仕方ないな……。

「分かりました、これからよろしくお願いします」

「うん、こちらこそよろしくね。ただ・教師としての仕事が最優先だから週末くらいしか修行に付き合えないし休む時も有るけどその辺は勘弁してね」

まぁ、それが妥当だな。
ＡＡＡの仕事もあっていそがしいだろうし。

「それじゃあ、今度の土日から始めようか。場所は世界樹前の広場に１０時集合だよ」

「はい！」

こうしてＯ．Ｓを使えるようになるための、
麻帆良での修行が始まった。

「よし。今日は此処まで続きはまた明日にしよう」

「はい、ありがとうございました」

初日の修行が終わる頃にはもう日は落ちて夕方になっていた。　途中に昼食などの休憩を挟んだとはいえ初日にしては良く持った方だと思う。

せっかくなので実際に咸卦法を見せてもらった。
いや本当にすごかった。
俺には魔力と気両方あるからO・Sの修行が落ち着いたらいつかやってみたいな……。

「くれぐれも家で無茶な自主訓練をしてはいけないよ。ちゃんと明日に備えて休むようにしてね」

「はーい」

そう言って帰ろうと歩きだしたとき、タカミチに止められた。

「そうだ、ちょっと待ってくれ京介君」

……なんだろう、ものすごく嫌な予感がする。

「なんですか？」

「確か君のクラスは１－１だったよね？」

「そうですけど、それが何か？」

「そのクラスに転校してきた子で神楽坂明日菜君っているだろう？実は彼女には親がいなくて僕が保護責任者になってるんだけど、なれない場所でと惑ってるみたいなんだ。僕は仕事で留守にすることが多いから寂しくない様に彼女の友達になってくれないかな？」

嫌な予感的中……。つーか、断れるわけないじゃん。ここで「だが断る」なんて言ったら、これからギクシャクするに決まってんだから。友達になってくれない？じゃねーじゃん、命令形じゃん。

「ハイ、ワカリマシタ」

「ああ、ありがとう！（返事が何か片言のような……）」

これで明日菜とも関わりが確定したな……、
もういっその事このまま原作に関わるのもいいかな……とさえ最近思えてくる。

まぁどちらにせよ小学校六年間は一緒なんだし、これくらいは別にいいか。

この考えは大きな間違いだったと気づいたのはもう少し後になる。

折れた心（前書き）

初の戦闘シーンですが、これが作者の限界です。
文才が欲しい……。

折れた心

ｓｉｄｅ京介

タカミチから魔力と気のコントロールを教えてもらい４年……、
１０歳になった俺は自室で最後の調整をしていた……。

遂に、遂に完成した！
長かった……。超・占事略決を見つけ、麻帆良学園に入学して、誰にも見つからないようにＯ．Ｓの練習をして、４年間の魔力と気のコントロールの修行の末、漸く！　ＯＳを修得できた！

「行くぞ！　ＯＳ　ｉｎ木刀！」

今はちゃんとした武器を手に入れることが出来ないから木刀だが、それでもかなりの強度を持っている。これが日本刀や槍を使った時、一体どれほどの力になるのだろう。
俺は自分の気持ちを抑えることが出来なかった。
早くこの力を思いっきり振るいたくてうずうずしていた。
しかし学園にばれることはあまりしたくない。それでも実戦経験は必要になってくるだろう。

「となると、やっぱりあの日位しかないな……」

半年に一度の大停電の日、麻帆羅結界が消えるこの日に俺は、媒介である木刀を持って外の人気の無い林に来ていた。

俺は自分の力を試す為に、学園に入りこんだ悪魔や鬼と戦おうと考えていた。

と言ってもそう都合良く出て来ることもなく、探知系の術も使えないので、ただ時間だけが過ぎていった。

「結局何も来なかったな……、せっかくO．Sを実戦で試すチャンスだったのになぁ……」

もう帰ろうかと思いその場を後にしようとした時だった。

「なんや、なんでこないなところに餓鬼がおんねん」

ふと振り返るとそこには鬼がいた。
背丈は大体２メートルちょっとくらいだろうか。
その手には体格に合った鉄製の棍棒を持っている。

「悪いな坊主、一般人に見られたからには死んでもらわなあ
かんねん。悪く思わんといてくれや」

そう言って鬼は持っていた棍棒を俺目掛けて振り下ろして来た。

「Ｏ．Ｓ　ｉｎ　木刀！」

Ｏ．Ｓによって大幅に強度が強化された木刀によって棍棒を防ぎ，
気によって強化した身体能力で踏ん張る。今まで鍛えてきた魔力と
気のコントロールは伊達じゃない。Ｏ．Ｓはその特性上、甲縛式Ｏ．
Ｓのように全身に装甲を纏いでもしないかぎり、どうしても身体は
無防備になってしまう。だが、麻帆良に来てから４年間魔力と気の
コントロールを徹底的に鍛えたお陰で、咸卦法の様に混ぜ合わせる
ことは出来なかったが、魔力と気の別々の場所での同時使用が出来
るようになった。これは感化法を使いこなせるタカミチだからこそ
教えられる物で、タカミチ自身も驚いていた。この方法なら魔力を
Ｏ．Ｓに集中つつ、体を守ることが出来る。

受け止めた棍棒を振り払い、一体距離を取る。

「!?なんや坊主、お前さん裏の人間かいな!?」

「そっちが勝手に勘違いしただけだろう?」

驚いている鬼に皮肉っぽく返す。

「はあああああ!!!」

一気に距離を詰めて斬りかかる。
木刀でもO.Sしたお陰でかなりの威力となっている。気で強化したとしても、ここまでの強化は出来ないだろう。改めてO.Sの力を思い知った。

「ぐうぅぅぅ、やるやないか坊主」

「まあね〜」

軽口を叩きながらも鬼との攻防は続く。体力が持たないのか鬼の体制が崩れた。今だ!
一瞬の隙を付いて渾身の一撃を叩き込む。

「ぐあああああぁぁぁぁぁぁぁ……」

止めの一撃を受け、鬼が送り返されていく。
これで終わった……。
俺はこの時、初めての戦闘の勝利に感極まっていた。
そのせいで、後ろから迫る者にがいることに気付けなかった。

ガァン！！

「……がぁ！？」

突然横殴りにぶっ飛ばされる。
脇腹に激痛が走った。戦いが終わり緊張が切れると同時に身体能力の強化も無意識に緩めてしまっていたせいでかなりのダメージを受けてしまった……。それでもこうして意識を保っていられるだけ効果はあったようだ。

「なんや完全に不意を付いた思うたのにまだ意識があるんか、ほんまに大したやっっちゃ」

……もう一体隠れてやがったのか。
クソッ！最悪だ。戦闘が終わったと思って油断した！

「甘いな坊主、こういう場所で簡単に気ぃ緩めたら命取りやで」

確かにそうだ……。俺は戦いというものを解かっていなかった。
だからこそ今、こんな状況にいる……。

「まあその歳にしてはようやった方や、
それでも実戦は早過ぎたようやな。
ほなそろそろ死んでもらおうか」

…死ぬ？……俺が……死ぬ？
その言葉が重くのしかかる。

恐い。

さっきまでの力を手にした勇者気分も、
勝利の喜びも、
いつの間にか何処かに消え失せていた。

代わりにあったのは、
これから殺されるという恐怖だけだった。

恐い恐い恐い恐い恐い恐い恐い恐い恐い恐い！
嫌だ、死にたくない！

「お、Ｏ．Ｓ！」

恐怖を振り払うように再び木刀を媒介にO・Sを展開し、痛む身体を引きずって鬼に斬りかかる。
だが……、

ガン！

！？

「なんやこの程度かいな、脅しおってからに」

棍棒で簡単に受け止められてしまう。
鬼には全く応えていないようだった。
木刀を纏うO・Sも先程と違って随分弱々しくなっている。
そのままO・Sを維持出来ずに、解除してしまう。

「なん……で…？」

「これで終いや、とっとと……死ねや」

無情にも棍棒が振るわれる。

不味い…！

そう思い咄嗟に気で防御するが殴られた勢いで近くの木に叩きつけられてしまう。後頭部を打ったらしく、俺はそのまま意識を失った。

折れた心（後書き）

京介はまだＯ．Ｓ位しか使えません。

戦う理由（前書き）

今回は多少ご都合主義が含まれます。
苦手な方はご注意を。

戦う理由

ｓｉｄｅ京介

……あれ？ここどこだ？
気がつくと俺はあたり一面真っ白い場所にいた。

「……俺って確か鬼と戦って、それで……死んだのか？」

「いいや、君は死んじゃいない、気絶しているだけだよ。と言ってもこのままほっとけばどっちみち死んじゃうけどね」

「……えーと、誰？」

気がつくと目の前に少年がいた。いつの間に現れたんだろう……。
二次創作とかＳＳだと、神とかそんな感じの存在で転生させてくれる存在だったりするけどこの少年は一体……。

「僕かい？そうだね……、呼び方は色々あるけど君からしたら神様とかそんな感じかな。ちょうど君と話がしたかったし、なにより君も聞きたいことが有るんじゃないかい？」

やっぱりか……、たしかに聞きたいことは山ほどあるんだ、これを期にいろいろ質問させてもらおう。

「……じゃあ俺がこの世界に転生したのはあんたの仕業なのか…？」

「いいや違う、それは僕がやった訳じゃないよ。君が転生したのは君自身の魂が強かったからだよ」

「魂が強いと、なんで転生するんだ？」

「輪廻転生ってあるだろう？この世のすべての生物は死んで輪廻の輪に入るんだ、そして魂を書き換えられて、また新たな命になる。けど君みたいな場合、魂が強いせいでほとんど書き換えられず、そのまま転生してしまったって訳。こういうのは意外とよくあるのさ。転生すること自体は別に特別じゃないのさ。」

なるほどそういうことか……ん？チョット待てよ。

「じゃあ俺はやっぱり死んだのか……？でも俺には死んだときの記憶がないんだけど……」

「おいおい、人の話をちゃんと聞いてたかい？ほとんどといっただろう？いくら魂が強くても一部分位はなくなるもんだよ。ちなみに

教えてあげると君は通り魔に包丁で滅多刺しにされた後、川に捨てられて死んでいるよ」

俺どんだけ酷い死に方してんだよ……。

「それで？わざわざ俺に何の用だ？魂が強いやつならほかにもいるんだろう？」

「いいや、君はその中でも特別な存在なんだ」

「おれが特別？」

「ああ、随分昔に人間に能力を与えて異世界に送るというのが一時期流行ったんだ」

「まんま二次創作じゃねーか……。」

「そうだよ。僕らにとっても君たちが二次創作を読むのと大体同じ感覚かな、ある理由ですぐにやめちゃったけどね」

「ある理由ってなんだ？」

「その理由は、……

送った人間みーんな死んじゃったからだよ」

……は！？

「いや可笑しいだろなんで死んでんだよ！？、そいつら皆何かしらの能力持ってるんだろ！？一人二人ならまだしも、全員死んだなんて……」

「確かに彼らには力を与えた。皆大喜びしていたよ、最初のうちはね。けど今までまともに戦いもしなかったのにいきなり銃だけ渡されて戦争に行かされるのと同じさ。みんなあっさり殺されちゃって話にならないんだよ。中には戦えたりするやつもいたけど、人を殺した罪悪感で自ら命を絶ったり、ほかの人間にいいように利用されたり、力に振り回されるやつだけだった。今の君なら解るんじゃないかな？」

「……」

神の言う事になにも言えない。それは……まるでさっきまでの自分自身じゃないか。ただO．Sを使ってみたいと言う理由だけで修行していた俺、ただ自分の得た力を振るいたいという理由だけで危険な裏世界へ足を踏み入れた俺と同じじゃないか……。

「結局力を与えた人間は誰一人としてまともな生き方をするやつはいなかった、それに引き換え君は自らの努力で力を手に入れた。そんな人間はとても珍しくてね。なのに君は調子にのって、力を与えた連中と同じ運命をたどろうとしている。これはもったいないと思って君に会いに来たのさ」

そうだったのか……。

「さて、状況説明としてはこんなとこかな。……それで、君はこれからどうするんだい？」

「どうするって……」

「いいのかい？君が得た力は誰から与えられた物でもない君自身が必死に苦労して手に入れた力だ。そんな力をいい加減な気持ちで使って、ただその場に流されていいのかい？君が戦う意味は一体なんだい？」

「俺は……この力を得たときも、どこかスポーツのような感覚で使ってたんだ。力を使うっていうのは相応の覚悟が必要なものだって、アニメや漫画を観ただけで解った気になってた……」

「実際に戦って死ぬかもしれないってなった時、俺は本当に恐かった。死んだら何もないっていうのに、俺はそんな簡単なことも解っちゃいなかった！俺は死にたくない！！前世じゃ叶わなかったけど、この二度目の人生ではもっと生きたい！俺は生きるために力を使う！」

「生きるためねぇ……、生きるというのは普通に生活していれば叶う願いだろう？それにわざわざ危険に身を投じたのは君だろうに。

ただ生きるだけじゃ意味がないだろう、生きた上で何のために君は戦うんだい？」

「そんなのこれから決めていけばいいさ。生きてりゃそのうち何か見つかるだろ」

「アッハッハッハッハ。まったく傲慢だねぇ、それって問題を先送りにしてるだけだろう？……でも、その考え方は嫌いじゃないよ」

うるへー。

こちとら必死に考えて出した結論だ、文句あっか。

「さて、言いたい事も言ったしそろそろ僕は帰るとしますか。もう君は大丈夫そうだし、もう二度と会うこともないだろう」

「ああ、いろいろありがとな」

「礼を言う必要はないさ。その力を使うのは君自身だし、答えも自分で出したんだから僕に感謝するのはおかしいよ」

「そうかい。そういえばなんでこの世界に超・占事略決なんてあるんだ？しかもなぜか俺だけ使えるし？」

そうこれが最後の疑問だった。誰も扱えないはずの超・占事略決が使える……、神が能力を与えた訳でもないなら一体何故？

「そうか、そういえば言ってなかったね。今君のいる世界は間違いなくネギま世界だ。といっても多少の誤差のある並行世界だけど、実はその世界に君以外にもう一人転生者がいたんだよ」

「えっ！それってまさか……」

「そう。君の先祖だ。」

マジデスカー！？

「君の先祖はもらった能力ではなく自力で超・占事略決を編み出したんだ。君と違って1から作り上げてね。」

まじかよ、俺のご先祖さま素でチートだったのか……。

「その世界はシャーマンキングの世界じゃないから、ネギまの世界観に合わせて作ったから内容も大分違っていただろう？」

そういえば普通のO・Sもなぜかのってたな……。

「ちなみに君と君の先祖が超・占事略決を使えたのは一度死んで魂が他と少し違うからだよ。ほら、シャーマンキングの世界って理論よりも魂や心が重要だっただろ？あれと同じ原理さ」

なるほどそういうことか……。

「さて、こんどこそ本当にさよならだ。現世で見つけてきなよ、君の戦う理由を」

「ああ、解ってるさ」

途端に周りが暗くなっていく……。

「じゃあな……」

そのまま俺の意識は現実に戻っていった。

ｓｉｄｅ現世

此処は……現世か……。どうやら戻ってきたみたいだなって、痛！ダメージ喰らってたのすっかり忘れてた。

目の前には先程俺をぶっ飛ばしてくれた鬼が近づいて来ている。どうやら俺が木に叩きつけられてから全く時間はたっていないらしい。なんて都合のいい……。

俺は傷付いた体に鞭を打って何とか立ち上がった。

「もう虫の息やないか、そのまま寝とったら楽に死ねたもんを……」

「生憎まだやり残したことが有るんでね。死んでやる訳にはいかねぇんだよ」

「はん！そんな体でようほざくわ。最初の頃の勢いもない、立つの

がやっとの状態でどうするんじゃ」

確かに最初の頃と違って体力は殆どない。その上攻撃も通じないとくれば、普通ならもう打つ手が無い。

だけど、さっきと違うのはそれだけじゃない。

「Ｏ．Ｓ　ｉｎ木刀！」

「なんや、またそれかいな……、さっき破られたばかりなの忘れたんか？」

さっきまでの俺にあって、今の俺に有る物の違い。それはＯ．Ｓを構築する上で一番大事なもの……、それは……。

「あああああああぁぁぁぁぁ！！！！」

「（来るか、ならまた防御して攻撃後の隙に思いきりぶん殴ったる！）」

木刀を振りかぶり全力で叩きつける。鬼も先程と同じように棍棒で防御する。だが、木刀はさっきと違い棍棒に止められない。それど

ころかそのまま棍棒をへし折ってしまう。

「なんやとおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉ！？」

まさか鬼も自分の棍棒を力づくでへし折られるとは思っていなかっただろう。

そのまま木刀を鬼に叩きつける。１０数メートル程飛んで、送り返された。

さっきまでの俺と違う物……それは俺の戦う覚悟である。

Ｏ．Ｓは使い手の心しだいで簡単に弱くなってしまう。だから死の恐怖に怯えていた心で創ったＯ．Ｓはあっさり破られてしまった。だが必ず生きると心に決めたその強い思いで創り上げたＯ．Ｓは本物の力を誇っていた。

これで俺は、ようやく本当の意味でＯ．Ｓをマスターしたのだろう。

そう考えながら地面に倒れた。

どうやら体力の限界に達したようだ。

睡魔と疲れがどっと襲ってきて、そのまま俺は眠りについた。

これから色々

ｓｉｄｅ京介

目が覚めると、俺はベッドで寝ていた。
確か鬼を倒してそのままぶっ倒れて……、あの後どうなったんだ？
いや、それより今俺には言わなきゃならない台詞がある！

「知らな「やぁ、目が覚めたようだね」……」

畜生、誰だ台詞を被せたのは！

「身体の方は大丈夫かい？」

「あっ、はい。大丈夫です。俺は一体どうしたんですか？」

このダンディーはタカミチか、せっかくだし聞いてみるよう。

「いやぁ驚いたよ。見回りしていたら林の中でボロボロの君が倒れているのを見つけてね。急いで治癒魔法を掛けて貰ったんだ」

確かに体が軽い。怪我もある程度治っているようだ。

「ああ、それと京介君。怪我が完治したら学園長が、話があるから学園長室に来るように言っていたよ」

やっぱり来たか……。このまま隠して居たかったがおそらくいろいろ聞かれるんだろうなぁ。まぁ、結局は俺の自業自得なんだけど……。

「分かりました。それじゃあ、また後で」

これからどうなる事やら……。

「失礼します学園長、天野京介です」

「入りなさい」

部屋に入ると学園長とタカミチがかなり真剣な顔で待っていた。
こりゃ言い逃れは出来そうにないな……。

「良く来てくれたのう京介君。君には幾つか聞きたい事があるんじゃが構わないかの？」

「はい、構いません」

「では聞こう。君はなぜ大停電の日にあんな場所に居たのかね？」

此処まで来たら正直に言っちゃったほうが良いよな……。全部俺の自業自得なんだし、いい加減に腹をくくろう。

「俺はあの日自分の力を試したくて学園の侵入者と戦おうと思ったんです」

「そうか……」

学園長はそれだけ言って直ぐに黙ってしまった。

「京介君、人は力を持つと変わらずには要られない。だから君の気持ちも分からなくも無いけど、一歩間違えれば君は死んでいたかもしれない……、それは君も今回の事で良くわかっただろう」

「京介君、儂らや多くの魔法使いも皆通ってきた道じゃ。じゃから君を非難したりせんが今回の事は反省して二度と同じ過ちを繰り返さんでおくれ」

「はい、分かりました。」

しかし思いの外あっさり終わったな……。俺はO・Sの事について聞かれると思ったんだが、杞憂だったかな？

「そして此処からが本題じゃ……」

……！

やはり来たか。どう答えようか考えていたが、学園長の話は俺の予想していた物よりも斜め上の物だった。

「タカミチ君と話し合った結果、そろそろ君に教えるべきだと判断してのう」

あれ？聞きたい事があるんじゃないのか？

「実は君が超・占事略決を使えるというのを最初から知っておったんじゃよ」

「……は？」

「驚くのも無理はない。君はそのことを隠すようにご両親から言われているんだからね。けど僕らにこのことを教えてくれたのも、君のご両親なんだよ」

「えっと、すいません。どういうことか、まったく解らないのですが……？」

「うむ、順を追って説明しよう。儂らがこの事を知ったのは君に超・占事略決の適性があると解った日に教えて貰ったんじゃ」

それって初日じゃねーか！

「なら何故態々俺にばらすなと言っておきながら学園長達に教えたんですか？」

「それは君の先祖が原因なんじゃ」

「俺の……？」

「当時、超・占事略決は魔法使い達の間で知らぬ者は居ない程の力を持っておったそうじゃ。あらゆる呪いの解呪、攻撃術の受け流し、そして武具の強化。どれもいままで見たことも無い強力な術式だったそうじゃ」

確かにあれらを完全に使いこなせたらこの世界じゃ協力だろうな。悪魔の石化魔法とかあるんだし、それを解呪できるとしたらそうとう凄いだろう。

「しかしどんな時代にもその力を悪用しようとする者がおる。西洋魔術師も東洋魔術師も超・占事略決をどうにかして手に入れようと皆躍起なったんじゃ。しかし誰一人使える者はいなかった」

神が言うには死んだやつしか使えないらしいからな、そんなやつ他にいないだろう。

「じゃが、本人以外に使えない事を知ると、今度は直接本人を手に入れようとする者が出てきた大きな所から小さな所、犯罪組織やありとあらゆる企業まで彼を狙い出したのじゃ。その後彼を見た者は誰一人おらず、何処かの組織に入って秘匿されているだの、死亡しただの、いろんな噂が飛び交ったが遂に表舞台に出て来る事は無かった。そして超・占事略決の存在自体忘れ去られた今の時代に再び超・占事略決を使える者が現れた」

「それが俺だった……と言うことですか？」

「その通りじゃ。君の両親は今まで秘匿にしてきた事が明るみに出るのを恐れた。そして君が自分の身を守れる位強くする必要があった。だが下手なことをすれば君の情報が漏れてしまうと考え、古い友人である儂に話したのじゃ」

「じゃあ、俺にばらさないように言ったのは……！」

「この事を知っているのは儂と高畑君だけじゃ。何処から情報が漏れるか解らんからの、他の魔法先生達に知られないようにする為じゃ」

「そうだったんですか……」

知らなかった……。裏でそんなことがあったなんて……。だから態々タカミチが指導してくれたのか。正直学園長はただのボケジジイだと原作やＳＳを読んで思っていたのだが考えを改めなければならなそうだ。

「君の為とはいえ、騙す真似をしてすまんかったのう」

「いえ、全然気にしていないです」

俺の為に態々タカミチが直々に鍛えてくれたんだ。寧ろ此方としては感謝している位だ。

「そう言ってくれると嬉しいのう」

「それじゃあ京介君、今週から本格的な修行をして貰うよ」

「はい！？」

ナンデストー！？
今までどれだけ頼んでも魔力と気のコントロールしかやらせてくれなかったのに！？

「え、いや、何でいきなり？」

「そんなの決まってるじゃないか。さっき君は自分の身を守れる位強く成らなきゃいけないって説明しただろう？鬼を倒せる位の実力は付いてるみたいだからね。実戦形式も織り混ぜていくから覚悟してね」

……マジで？

どうやら俺が魔法に関わるのは超・占事略決を見つけた時から確定していたようだ……、これから色々大変なことになりそうだ。

これから色々（後書き）

次話投稿は7月17日を予定しています。

夏の旅行（前書き）

今回大きな原作改変があります

夏の旅行

ｓｉｄｅ京介初めての戦闘からもう一年が過ぎた。あれからタカミチとの修行（と言う名の拷問）もかなりレベルに上がって（エスカレートして）きた。俺自身もＯ．Ｓを使った実戦が出来て嬉しいのだが、タカミチの攻撃が小学生に向けるような物じゃ無くなりつつある。

「やるね、京介君。ならこれならどうだい？千条閃鏃無音拳ッ！！！」

「ちょっ、それ反そ……ぐぼぁ！」

……最近の修行は大体いつもこんな感じ。

キツイマジキツイ。マジパネェよタカミチ、二次創作じゃオリ主に負けっぱなしが多かったけど、そんなことはなかった。伊達に英雄と呼ばれてないというのが非常に良く解った。

「いや、もうあれぐらいやらないと僕も負けちゃいそうだからね、つい本気で」

「ハァ、ハァ、嘘つかないで下さいよ。全然余裕そうじゃないですか」

「アハハ、そんなことないよ。京介君も相当強くなってるからあれぐらいじゃないと修行にならないだろう？」

「そりゃそうですけど……」

それでもこれはあんまりだと思う。

「それじゃあ今日は此処までにしようか。ところでクラスては皆と仲良くやれてるかい？」

「ええ、上手くやってますよ」

自分の立場を理解してから意図的に原作から離れようとするのは止めた。俺の持つ力からして確実に原作に巻き込まれるだろうと思い、諦めて仲良くする事にした。

元々同じクラスというのもあって仲良くなるのに時間は掛からなかった。最初の頃はＣＯＯＬ過ぎて会話が続かなくて苦労したが、最近は感情の起伏が出てきて話易くなりこのかと友達だということも手伝って直ぐに仲良くなれた。

「ああ、それと今度の夏休みはまた暫く修行に付き合えなくなりそうだから」

「またＡＡＡの仕事で出張ですか？」

「いや、今回は仕事じゃなくプライベートだよ」

「旅行ですか？良いですねー。お土産期待してますよ」

「ふむ……。ならどうせだったら君も行くかい？」

「えっ、いいんですか？プライベートなんじゃ……」

「ほら、いつも休日は修行ばかりで君も録に遊ぶ事も出来なかっただろう？たまにはこんなのも良いんじゃないかと思ってさ。勿論い

やなら断ってくれて構わないよ」

「行きます！是非行かせて下さい！！」

正直な所いつも暇さえあれば修行していたのでこの誘いは非常に嬉しい。小学生なのに全く遊ばなかったからなぁ……。我ながら良くやったもんだ。たまには思いっきり遊ぶとしよう。

「それじゃあ、日程とかはまた後で連絡するからそれまでに保護者の許可を取っておいてくれ。何せ１ヶ月の長い旅行だからね」

「分かりました！必ず許可を取って来ます！」

ただ一つ不満があるとするなら、一緒にに行く相手がいい歳したオッサンだという事だ。……明日菜辺りなら喜びそうだ。

時間が飛んで旅行当日。普段の学校の成績が問題ないのが幸いしてあっさり許可が取れた俺は、空港でタカミチを待っていた。

「あっ、先生おはようございます」

「おはよう京介君。それと、今は学校じゃないんだし先生じゃなくていいよ」

「分かった、タカミチ」

そうなのだ、本格的な修行をしだしてから学校以外では名前でいいと言われたのだ。

「それじゃあもうすぐ搭乗だ、今の内にチケットを渡しておくよ」

そう言ってチケットを渡してくるタカミチ。そういえば旅行先は一体何処なんだろう？パスポートを用意した辺りから外国だと思うが、何処の国だろうか……？

そう思ってチケットを見てみるとそこにはイギリス行きと書いてあった。

（イギリスかぁ、イギリスって確かそんなに美味い飯じゃないとか聞いて……うん？イギリス……？なんだっけ、何か忘れているような……。まぁいっか、その内思い出すだろ）

そう楽観的に考え、飛行機に乗り込んでいった。

やっちまったぁぁぁ！！！イギリスってネギ・スプリングフィールドの故郷じゃねーかぁぁぁぁ！！！！！

なんてこった……、イギリスに旅行って時点で気付くべきだった！

原作の3年前にタカミチがネギに会いに行ったの忘れてた！

よりによって気付いたのが飛行機に乗り込んだ後タカミチにイギリスの何処にいくのか聞いた時だもんな……。

ウェールズって言ってたからネギに会うのは確実だろうなぁ……。

おそらくこの旅行の本当の目的は俺とネギを合わせる事だろう。

俺も大分実力を付けてきたとはいえ、俺の後ろ楯は学園長とタカミ

チしか居ない。……だが、英雄の息子であるネギと仲良くしてくれれば味方となる人間も大勢出て来るだろう。

そうなれば俺の力を狙う者が出てきても、迂闊に手出し出来なくなる。

俺をネギの味方にしようという考えもあるのだろうが、これは俺とネギ二人の安全を守る為だろう。

「ところでタカミチ。ウェールズに一体何しに行くの？誰か知り合いでもいたりするの？」

「（鋭い所を突いてくるな……）実はそこにはネギ君ていう友達がいてね、君と同い年なんだけどあまり同年代の友達がいなくてね……、アスナ君の時みたいにまた仲良くしてくれると助かるよ」

「別に俺は構わないよ」

俺は立場上ネギと交友を深めておいたほうがいいだろう、これからお互いに助け合うことになるだろうし……、けど打算的な思いで仲良くしようとは思わない。そんな考えで仲良くなろうというのは間違っている。それはそれ、これはこれだ。

「さあ着いたよ。ここがウェールズだ」

いろいろ話している間に着いたようだ。いよいよ原作主人公とご対面だ、流石に少し緊張する。
どうやらタカミチは村の人に挨拶をしているようだ。って、あれはもしやネカネさんでは！？

「お久しぶりですね。高畑さん。ネギが会いたがってましたよ」

「いやぁこちらこそお久しぶりです」

？？？？？タカミチは初めてウェールズに来たんじゃないのか？
確かネギと初めて会ったのが原作の3年前だから今日が初めてのはずだが……。

「タカミチは前にもここに来たことがあるのか？」

「そうだよ。前は3年前だったかな。それがどうかしたかい？」

おかしいな……、原作と食い違っている。俺の思い違いか……？それとも原作で語られていないだけ……？

「そういえばネギ君の姿が見えませんが……？」

「ネギなら今日、魔法学校の終業式を終えてもうそろそろ帰って来る頃だと思いますけど……」

「ただいま！お姉ちゃん！」「ただいま！ネカネさん！」

ネカネさんがそう言った直後二人の少女が割り込んできた。

片方は髪をツインテールにした少し勝気そうな年下の子だった。

もう片方の少女はボーイッシュな感じがする子で、俺と同い年位だろうか……？

「あらお帰りネギ。丁度今高畑さんが来た所よ」

その少女は一瞬こちらを見た後すぐにタカミチに話しかけた。

「久し振りタカミチ！そっちの人は？」

「久し振りだねネギ君。こっちは僕の学校の生徒の天野京介君だ。同い年だから二人とも仲良くするんだよ？」

「そうなんだ。はじめましてネギ・スプリングフィールドです。宜しくね！」

「私はアンナ・ユーリエウナ・ココロウァです！」

……はぁ！？

片方がアーニャだってことは良い、問題はもう片方だ……。

この子がネギ・スプリングフィールド！？

……OK一旦落ち着こう。

俺が知っているネギ・スプリングフィールドは男であって断じて目の前に居るような女の子ではない。

俺が知っているネギ・スプリングフィールドは年下であって決して同い年ではない。

だが間違いなく、目の前にいるのは俺と同い年の少女だった。

夏の旅行（後書き）

次回投稿は７月２４日予定です

ネギ・スプリングフィールド？（前書き）

総合評価５００ｐｔ突破！
これからも更新がんばります！

ネギ・スプリングフィールド？

ｓｉｄｅ高畑・Ｔ・タカミチ

今僕は京介君を連れてウェールズに来ている。

京介君には旅行と嘘をついて連れてきてしまった。

行き先に疑問を感じないよう認識阻害の魔法を掛けてまで……。

今回は学園長がネギ君と京介君の仲を取り持つよう命じられた。それだけ二人の存在は重要なのだ、ネギ君は世界を救った英雄と世界を破滅させようとした王女の一人娘。京介君は伝説の超・占事略決の唯一の使い手。

両方共その事実が明るみに出れば二人を狙う者も出て来るだろう。

ネギ君には英雄の娘ということで組織的に協力する事ができる。

だが京介君にはそんなおおっぴらに組織の力で助ける事が出来ない、もし助けてしまえば彼の秘密に気づく者が出て来るかもしれない。

しかしネギ君の味方に成れば、英雄の娘の味方と言うことで　組織をあげて彼に協力出来る。

そしてもしネギ君のパートナーに成ってくれれば、彼の秘密がばれ

たとしても下手に手を出す人間はいないはずだ。

二人を騙すのは気が引ける……。だが僕達に出来るのはこれくらいしか思い付かなかった。

（いつかは真実を話さなきゃな……）

そう思いながら僕は二人を引き合わせた。

ｓｉｄｅネギ

僕とアーニャは今日、魔法学校の終業式が終わって急いで家に向かっていた。

「どうしよう、遅くなっちゃった。タカミチもう来てるかなぁ？」

今日は久し振りにタカミチが来る日なのにこんな日に限って帰りが遅くなるんだもんなぁ。

タカミチは僕の父さんの友達で3年前来たときも父さんの事について話してくれたり、僕の魔法の修行に付き合ってくれたりした人で、それ以来友達になった。

……今更思うけどおじさんの友達ってどうなんだろう。

やっと家に着いた。って、ああ！やっぱりもうタカミチが来てる！

「ただいま！お姉ちゃん！」

「ただいま！ネカネさん！」

タカミチと話してたお姉ちゃんに話し掛ける。ネカネお姉ちゃんは僕の従姉妹で綺麗で優しい自慢の姉だ。

「あらお帰りネギ。丁度今高畑さんが来た所よ」

良かった、タイミングバッチリだったみたい。

……あれ？一緒にいる人は誰だろう？

黒髪黒瞳の男の子で歳は大体僕と同年代位だと思うけど……。

「久し振りタカミチ！そっちの人は？」

タカミチの知り合いかな？とりあえず気になったので聞いて見る。

「久し振りだねネギ君。こっちは僕の学校の生徒の天野京介君だ。同い年だから二人とも仲良くするんだよ？」

へぇ、やっぱり同い年だったんだ。自分で言うのもアレだけど僕は学校では若干浮いてるから、あまり同い年の友達が居ないから仲良くしたいな。

「はじめまして、ネギ・スプリングフィールドです。宜しくね」

なんかすごいビックリしてるみたいだけどどうかしたのかな……？

ｓｉｄｅ京介

驚いた、今までで一番驚いた。ぶっちゃけこの世界に超・占事略決があることよりも驚いた。

そういえば神様がこの世界はネギま！？の並行世界だって言ってた

っけ、すっかり忘れてたぜ……。

しかしこれでもう原作知識は役に立たないだろうな……。しかしここで一つ疑問が出て来る。

ネギが３－Ａと同い年と言うことは産まれた時期が違う。この世界のネギが産まれた頃は丁度エヴァンジェリンが封印される時期だったはず……。その上ナギ・スプリングフィールドが失踪するのがネギが産まれる直前だった、もしこっちの世界でも同じ時期に失踪しているとしたらその時ネギは5歳なので少なからず父親の事を覚えているはずである。その上新たなる世界の残党との戦闘や悪魔襲撃のイベントもかなり原作と違ってくるだろう。

もうこの世界はネギま！？の世界を元にした完全な別世界とみたほうがいいだろう。

なんせ主人公の設定から違うもん。なんだよ性別と年齢両方違うって、それじゃあ性格だって変わって当然じゃねーか。ＴＳに年齢変更、性格改変、おまけにオリ主って要素多すぎだろ！普通一つに絞るだろ！

性別と年齢が違うということは物事を見る価値観や考え方、周りの人達の態度、そしてネギ自身の対応が原作と変わってくる。

そして年齢が違うから社会的な立場が違う。原作ではまだ子供だからと甘い目で見られていたがそれもなくなるだろう……。

これらによってストーリーも大幅に変わるはずだ。

そもそもこの世界がこのままハッピーエンドになるかどうかも分からない……。魔法世界消滅なんてことになったら堪ったもんじゃないし。最悪の場合俺が直接介入して何とかするしかないだろうな……。

まっ、今考えても仕方がない。

なんとかなるか。

「ああ、こっちこそよろしく。ネギ、アーニャ」

〜一週間後〜

俺がウェールズに来てから一週間が過ぎた……。

あれから色々意吹っ切れた俺は普通にネギ達と仲良くなっていた。
タカミチはネギに軽く修行をつけたり。俺はネギやアーニャと適当に駄弁っていたり、子供らしく遊んだり、それなりに楽しい毎日だった。

そんなある日。
ネギの修行風景を見ていたときの事だった。

「へぇー。じゃあ、京介さんもタカミチに修行をつけて貰ってるんですかー」

「ああ、基礎の部分だけだけどね」

最近は実戦形式で戦ってるけどね。
タカミチがもう強いのなんの。

「京介さんは実際、どれくらい強いんですか？」

「京介君はかなり強いよ。少なくとも僕と互角に戦える位にはね」

ホント最初は酷かったよなぁ……。勝手な事したお仕置きも兼ねてフルボッコにされたし……。今ではもう慣れたけど。

「（そんなに凄いんだ……。）あの、京介さん、僕と模擬戦してくれませんか？」

「模擬戦？」

いきなり何を言い出すんだ、この坊主は？いや女だったか……。

「いきなりどうしたんだ？」

「実は僕、ある目的があって、その為にどうしても強く成りたいんです。タカミチは充分強いと言ってくれるんですが、実戦形式が無いから余り実感が無くて……。それで、タカミチが強いと太鼓判を押す京介さんと戦ってどれくらい自分の力が通じるのか知りたいんです」

成る程そういうことか……。どうしようか……、ネギは現時点で１０歳。本来なら原作が始まる時と同じだが、このネギは女だ。腕力も男より低いだろう。とりあえず実力を測る為に受けてみるか……？

「たとえ僕が負けても実戦経験や体の動かし方とか、得る物は沢山あると思うんです。それに、京介さんがどんな戦い方をするのか興味がありますし……」

俺の戦い方か……、かなり特殊だから参考になるのか？

「いいよ、やろう」

「ホントですか！？」

「但し、お前も修行して疲れてるだろうし、俺も準備したいからやるなら明日だ」

「分かりました！よろしくお願いします！」

ぶっちゃけた話、俺もネギと同じ気持ちだった。俺の力は秘匿されているのでタカミチ以外に相手をしてくれる人が居ないのだ。タカミチ以外の相手は初めて戦った時の鬼だけ。いつまでも同じ相手だと修行がワンパターンに成ってしまうから気分転換にも丁度良いだろう。何より魔法使いを相手にするのは初めてだ。タカミチは魔法使えないし。

（明日の模擬戦が楽しみだ）

実の所一番楽しみにしていたのはネギではなく俺だった。

ネギ・スプリングフィールド？（後書き）

次回更新は７月３１日を予定

VSネギ（前書き）

今回もやはり短い……。

VSネギ

ｓｉｄｅ京介

模擬戦の約束をしてから1日。俺とネギは得物を構えて対峙していた。

「審判は僕が勤めさせて貰うよ。ルールは降参するか戦闘続行不可能になったらその時点で終了。危なくなったら僕が直接止めるからね」

まぁ、そうでもしないと泥沼になっちまうもんな……。

「ネギー！頑張れー！」

「あんまり無茶しちゃ駄目よー」

少し離れた所からアーニャとネカネさんがネギの応援をしている。と言ってもネカネさんは怪我をしないか心配しているだけのようだが。

これってかなりやりずらいよなぁ……。
下手にボコッたら後でどうなる事やら……。

「京介さん、戦う前に言っておきたい事が有るんですけど……」

「なんだ？ルールの確認か？」

「京介さん、僕に手加減しようとか考えてませんか？」

む、気付いたか……。俺って顔に出やすいのか？

「もしそうなら手加減なんて止めてください。僕は全力の貴方と戦いたいんです。」

全力か……。まぁ本人が言うなら問題ないか。

「……ああ、分かった。全力でいこう」

「二人とも準備はいいね？それじゃあ試合開始！」

タカミチの合図と共に俺はＯ．Ｓを構成した。

ネギも呪文詠唱を始める。

「ラス・テル・マス・キル・マギステル
光の精霊１７柱。集い来たりて敵を討て魔法の射手１７柱！」

原作でもお馴染みの魔法の矢がまっすぐこちらへ向かってくる。
と言ってもタカミチと何度も戦っているのでこれくらいの攻撃は簡単に避けられる。

「そう簡単に当たるかよ」

やっぱり戦闘経験が有るのと無いのとでは大分違うな……。手加減しないとは言ったものの、この調子だとこの勝負あっさり決まりそうだな。

そんな思いとは裏腹にネギは杖にまたがり上空にとんだ。

「雷の精霊１３柱、集い来たりて敵を討て。魔法の射手１７柱」

俺の攻撃の届かない場所からの遠距離攻撃か……確かに持ってる武器は木刀だけだからその判断は概ね正しい。俺は空は飛べないし。
俺は攻撃を避けつつネギに向かって思いっきり跳躍したが、ネギの

いる高さまでは届かない。
だがそのまま宙を蹴ってネギの目の前に移動した。

「！？」

「落ちろ！」

いきなり空中で移動した俺を見て驚いているネギを地面に叩き落とす。虚空瞬動は魔法じゃなく技術だから見るのは初めてだったのだろう。

「ネギ君、まだやれるかい？」

「だい……じょうぶ…です」

かろうじてまだ戦えるようだといっても次で決着だろう。

「強いですね京介さん」

「タカミチに大分しごかれたんでね。これくらいは当然だ」

「くっ！闇夜切り裂く一条の光、我が手に宿りて敵を喰らえ白き雷！」

こんどは魔法の矢ではなく威力の高い魔法を使ってきたか……、最後の足掻きと言った所か……。だが相手の体制も崩していない、不意打ちでもないのにまともに当たるハズが無……。

「魔法の射手１７柱！」

「って無詠唱呪文！？」

油断していたところに魔法の矢を打たれて捕縛されてしまった。クソッ！少し油断しすぎたか、まだまだ俺も甘いな……。無詠唱にしては白き雷を打ってからの時間が早すぎるからおそらく遅延呪文だろう、さっき上空であらかじめ唱えていたのか……。しかも攻撃ではなく捕獲専門の戒めの風矢ということは当然次の攻撃を確実に当てるための布石……。

「ラス・テル・マス・キル・マギステル、来たれ雷精、風の精。雷を纏いて吹きすさべ、南洋の風」

！？おいおいこの詠唱は……。

必死に捕縛振り払いなんとか動けるようになるがすでに詠唱は終わ

っている。このタイミングじゃ避けられそうにない、だが防御するにしてもかなりきついだろう。回避も防御も不可、だがまだ打つ手は残っている。実験段階だからあまり使いたくなかったが……なんとかなるか！

「雷の暴風！」

ネギの手から打ち出された雷がこちらへ向かってくる。くらえばそのままゲームエンドだろう、だが俺はあせらずに心を落ち着かせる。

「超・占事略決、巫門遁甲！」

そのまま魔力の波に乗りすべて受け流していく。これは避けた訳ではない敵の魔力（気）を読み取り進むべき方位を見極める術である。これは原作のようにほとんどの攻撃を無効化できるがいくつか条件が有った。自分の実力以上の攻撃は無効化できないということ。魔力や気で強化した直接的な物理攻撃等には無意味ということ。その上眠りの霧やおわるせかいなどＲＰＧでいえばステータス異常の攻撃や精神的干渉、空間ごと殲滅する魔法にたいしても通じない。つまり今の俺の実力では燃える天空や千の雷なんか防げないし、タカミチの居合い拳は元々防げない。おわるせかいは進むべき道がないので受け流せない。色々と例外が有ったりで万能という訳ではない。

ネギは巫門遁甲によっぽど驚いたようで唖然としている。
その隙を逃さずそのまま一気に接近し木刀で杖を叩き落し首に突き

つける。

「まだやるか？」

「……降参です」

ネギの降参によりこの模擬戦に決着がついた。

帰還（前書き）

しばらくパソコンの使えない状況にあったせいで更新おくれました。

帰還

ｓｉｄｅ京介

ネギとの模擬戦が終わり一週間が過ぎた。

あれから何度も模擬戦する事になってしまった。

まぁ一言言わせてもらうと……。

ネギマジパネェ。

最初は全部俺の圧勝だったのだが、回数を重ねる事に食らい付いてくる様になった。

……ネギ、お前実戦は初めてなんじゃなかったのか？

もう充分戦えるレベルねーか！

よくよく考えてみればネギの親ってサウザンドマスターと王女なんだよな……。だったらその子供もバグキャラでも当然か……。

そんな感じで過ごしていたのだがそろそろ日本に帰る日にななった。

「ネギ、アーニャ、二人とも元気でな」

「京介さん！貴方との模擬戦、色々勉強になりました！この二週間とても楽しかったです。」

「タカミチさんも京介もまた遊びにきてね」

「そんなに言わなくてもまた直ぐに会えるさ。心配ないよ」

中二の冬になったらいやでも顔会わすことになるだろうからな……。

しかしネギの過去についてはあまり解らなかったな……。内容が内容なだけに直接聞き出すことは出来そうになかったからな……。おそらく父親の方には会っているはずだ。その証拠に形見の杖を持っていたからな。後々のストーリーで明らかになるとはいえ、やっぱり気になる。

ネギが日本に教師をしにくるまで後三年ほど、原作始まるまでにもっと強くならなきゃな……。

こうして俺の初めての海外旅行は幕を下ろした。

しかしまた何か忘れているような……、なんだったっけ？

ｓｉｄｅ京介

麻帆楽よ、私は帰ってきた！

え？いきなりテンション高すぎるって？

しゃーねーだろ、結局海外旅行でウェールズに行った以外に大した観光出来なかったんだから……。一応得る物はあったから良かったと言えば良かったんだが……。もう少し色々観光したかったなぁ……。

終わってしまったことに関してはしょうがない。今の俺に出来ることは残りの夏休みをどう過ごすかだ。

ちなみに宿題は日記以外全部片付けている。小学生の宿題なので楽に終わった。

しかしいざ遊ぼうと思ってもやることがない。買い込んだゲームは全部クリアしてしまったし、小学生だけでゲームセンターやカラオケに行ける訳がない、となるとやっぱり修行する位しかやることがなくなってしまう。

そして俺は今のＯ．Ｓに大分慣れてきたので、そろそろ新型Ｏ．Ｓを……それも原作には無かった俺オリジナルのＯ．Ｓを作ろうと思っている。

その為に俺はまず……、

Ｂｏｏｋｏｆｆへ向かった。

現在俺はｂｏｏｋｏｆｆで立ち読み中である。しかし立ち読みを始めて５時間が経過。俺の体力（空腹）は限界が迫っていた……。

流石に辛くなってきたので、気に入った漫画を買って今日は帰宅する事にした。

ちなみにこの立ち読みは、ちゃんと新型Ｏ．Ｓを造り出す為に必要な事である。

……念の為言っておくが決してただ修行をサボっていた訳ではない。

Ｏ．Ｓは想いの力、そしてＯ．Ｓを造り出す上で完成形のイメージは無くては為らない物である。そしてそのイメージを強固な物にするため漫画などの中から使えそうなアイデアをリスペクトしていこうという訳だ。

当然漫画などのパク……リスペクト以外にも既に幾つか案が浮かんでいる。

漫画の召喚獣や武器などをリスペクトする一番の理由はカッコイイからである。

誰でもゲームや漫画などフィクションの中の登場人物や技に憧れを

持つ事は有るだろう。
俺の場合もまさにそれで、フィクションの世界に憧れたのは一度や二度じゃない。実際に使えたら相当テンションが上がるだろう。

何気にこの理由が一番重要だったりする。何も知らない人が聞けば只の痛い人だと思うかもしれないが、原作でラキストやマルコが戦う時に勝負服に着替えて自分のテンションを上げていたのと同じように、俺もO・Sで自分のテンションが上がればそれだけO・Sの質が上がるということだ。

俺はようやく自分の戦い方というものが掴めてきた。

状況によって幾つものO・Sを使い分けて戦う魔法剣士軸のオールラウンダーといった感じだ。

そうなると当然他の武器の扱いを練習しなければならないし、木刀など木製の武器しかないので媒介も用意しなければならない。原作開始までやるべき事は山ほどある。

そうときまれば……。

ｓｉｄｅ学園長

「という訳なので武器をください」

「いや、いきなりそんな事言われてものぅ」

大停電の日以来すっかり砕けた態度の京介君がいきなりＯ．Ｓに使う武器を幾つか欲しいと言ってきおった。

初めて会った頃と比べ随分図々しくなったもんじゃ。

「しかし京介君、木刀ならまだしも本物の真剣や銃ともなればそれなりに重量があるんじゃぞ？幾ら鍛えているとはいえまだ幼い君の体では扱いきれんじゃろう。一体何を考えているんじゃ？」

「木刀を振るうのにも大分慣れてきたしそろそろ別の武器も試してみたい、それにいつか本物の武器を持つ事になるならなるだけ早いほうが良いと思ってな」

うーむ、普通なら一つの事を極めようとするものなんじゃがのう……。

しかし別の考え方をするなら新たな才能を見つけられるかもしれん。何より京介君には強くなってもらわなくてはならん。今はまだネギ君との繋がりが深いものになっていないこの状況で京介君が狙われたら最悪じゃ、最低限自分の身を守れるよう強くするためならこれくらい……。

「うむ、分かった。今すぐという訳にはいかんが夏休み明けまでにはこちらで幾つか用意しておこう。」

「ありがとうございます。」

「その代わり今までと違って本物の武器じゃから細心の注意を払うんじゃぞ。」

「はい、分かりました。失礼しました」

そう言って京介君は部屋からでていった。

「やれやれ、子供一人まともに守れないとは、我ながら情けないのう……。」

そう言い儂は溜め息を付いた。

サウザンドマスター、ナギ・スプリングフィールドの娘ネギ。

彼女と関わらせることでしか京介君を守る事が出来ない自分がとても不甲斐なく感じるわい……。

英雄の子というだけで、ただ偶然力を持っていただけで人々から特別視される。そんな事は馬鹿げておる。

組織のトップになった今でもその現実を変える事は出来んかった……。

ならばせめて……、儂の手の届く範囲位は……、彼等を守っていこう。

side京介

案外あっさりOK貰えたな……、もう少しごねるかと思ったんだが……。

出来れば図書館島の立ち入り許可も頼もうかと思ったがどうせもうすぐ入れるようになるので黙っていた。

これで媒介についてはある程度解決した。

とりあえず新しい武器が届いてから練習を始めるとして、今俺に出来ることは……

……またｂｏｏｋｏｆｆで立ち読みする事だけだ。

日常（前書き）

ようやく更新できた……。使っていたパソコンが壊れたせいでしばらくほったらかしになってしまいました。
これからはなんとか更新していけそうです。
これからまたよろしくお願いします。

日常

ｓｉｄｅ京介

自分の身を隠すというのはそう簡単な物ではない。
視覚に限らず嗅覚や聴覚すら欺かなければ隠すとは言えない。
どれか一つでも疎かにすれば容易に見つかってしまうだろう。

俺は今自然と一体になって限りなく気配を薄くしている……。

足音が聞こえる……。奴が……、俺を探し求める鬼が直ぐ側まで来ている……！

ザッザッザッザッ。

鬼は丁度俺の目の前にまで来た。此処まで接近されたら少し注意すれば、ばれるだろう。

見つかる……！

ザッザッザッザッザッ。

だが鬼は俺に気付けなかったようで、その場から去って行く足音が聞こえた。

助かった……。

そう思った次の瞬間……。

「京君見ーつけた！」

見つかっちゃった！

「ほんなら次は京君が鬼なー」

現在俺達は小学生らしくかくれんぼ中である。

面子は俺と木乃香と明日菜、そしていいんちょである。

因みに明日菜といいんちょは同じ場所に隠れていたようで、途中から喧嘩になっていた所を発見した。

「あんたのせいで見つかっちゃったじゃないの！」

「貴方こそ、あそこで声を出さなければ！」

「もうその辺にしとけよお前等」

いつもこの二人が喧嘩していたら俺が止めるパターンが殆どである。

二人とも一般人にしては案外強いので止めるのに苦労する。

子供は元気有り余ってるから手加減知らないんだよなぁ……。

でもたまにはこうして童心に帰るのも楽しかったりする。

「京君早くー」

「ハイハイ、1、2、3、4、5、6……」

麻帆楽で遊ぶ時は大体こんな感じ。

「あー、今日もよく遊んだなー」

皆と遊んだ帰り道、俺はそうぼやいていた。

そしてふとゲームショップが目に入る。
そういえば学校で面白いって話題に上がってたゲームがあったな……。

生憎転生してからゲームや漫画は余り興味を示さなかった為、余り話題についていけなかった。

「せっかくだしちょっと見ていくか」

そんな軽い気持ちで店に入って行った。

うーん、やっぱり余り前の世界とハードは変わらないしソフトも同じ……！？いや、ちょっと待て、何かがおかしい！

異変に気付いた俺は直ぐに他の棚を確認する。

（やはり……、クソッ！）

俺は店を飛び出してそのまま近くのコンビニに駆け込んだ。
そして自分の予想が外れていることを祈りつつ、ジャンプを読んだ。

「そんな……嘘だろ？」

だが現実は非情にも俺の希望を打ち砕いた。

「ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥが……、乗っていない……。」

そう、この世界の原作開始時期は２００３年……、今はその前の１９９９年……、Ｏｎｅ　ｐｉｅｃｅはまだ連載していないのだ。

おまけに生前はまったモンスターハンターに至ってはＰＳＰすらまだない時代だ。

それどころじゃない。この時代はまだゲームボーイやらファミコンの時代、現代っ子の俺にレトロゲームだけしかプレイするものが無いというのは余りに酷過ぎる。

モンハンの新作をプレイしたり漫画の続きを読むには、後何年待たなくてはならないのだろう。考えただけで気が遠くなってくる。

最悪だ……、転生してから本気でそう思った。

時間がとんで冬休み直前。

「なーなー京君。そんなに難しい本全部冬休み中に読むん？」

「読むよー、超読むよー」

俺が今持っている本はすべて図鑑である。昆虫や魚、鳥類などの生物図鑑もあれば武器の図鑑や乗り物などジャンルはさまざまである。

前にも言ったと思うがＯ・Ｓの構築にはイメージは必要不可欠であるが、当然知識も必要になってくる。

原作と違い、霊や精霊を使う訳ではないので媒介に魔力をぶちこむだけでは完成しないのだ。

特に生物を模したＯ・Ｓはよほどうまくイメージを固めなければいけないのでとにかくその生物について知らなければならない。

そのせいで生物系に関してはまったく使い物にならないのが現状である。

まずは知る事。

知識がなければ俺の能力は使いこなせない。それ故にいくら小学校の授業でもバカみたいに真剣に受けている。どんな小さな知識でも無駄のことはないからだ。

今ではあらゆる分野の学問を勉強している。小学生だからと言ってのんびりしている暇はないのだ。

今では日常の全ての事情がＯ・Ｓのために役立てられると思っている。

「しっかし、よくそんな図鑑ばっかり読む気になれるわね」

「脳筋の明日菜には分かるまいよ……」

「うっさいわよ！知識オタク！」

……おかげでこんなあだ名がついてしまった。

ｓｉｄｅ学園長

うむむ、これはちと不味いことになったかもしれんのう……。

いつかこの時がくると思っておったが、こんなに早いとは思わんかったわい。

このままでは世界にばれるのも時間の問題じゃろう。

早急に対策を練らねばならんのう……。

「学園長、決断は早いほうが……。

もうこの学園でも噂に成りつつあります。いずれ真実にたどり着く者も出てきます。」

タカミチ君の言う通りじゃ。余りこんなことをしたくは無かったんじゃが、この件に関してはそうも言ってられん。

今儂に出来ることはこれくらいしかない。

「タカミチ君、京介君を呼んでくれ」

これからまた一波乱有りそうじゃわい。

一体どうなることやら……。

中等部入学（前書き）

今回ご都合主義が含まれます。

中等部入学

ｓｉｄｅ京介

客観的に見るのと主観的に見るのでは大分違ってくる。他人から見て羨ましいことでも、本人からすれば苦痛だったりする。

今まで俺は苦痛とは言うものの、心の中ではいい思いをしているのだろうと思っていたが、やはりそれは客観的意見にすぎない。実際に主観になって見るとその苦痛に思い知らされる。

（視線が……、痛い。早くこの場から全速力で逃げ出したい……！）

俺を見る視線は興味や困惑など様々だがこの教室のほぼ全ての視線が俺に向けられている。

それも当然のことだろう。何故なら俺は男でここは女子校なのだから。

（これは……想像以上に辛い……。何で、何でこんなことになっちまったんだ……？）

その原因は1ヶ月前に遡る。

〜1ヶ月前〜

いきなり学園長室に呼び出しって俺何かやらかしたかな……？修行も普通にこなしてるし学校生活も問題ないはずだが……。

しかし毎回なんで態々女子校まで来させるなよ。視線が痛いっつーの。

コンコン。

「失礼しまーす。」

そういって学園長室にはいる。中では学園長とタカミチが何やら深刻そうな顔をしていた。

なんか前にもあったなこんな状況……。

「よく来てくれたのう京介君。察しの通り今日君を呼んだのは超・占じ略決の事についてじゃ」

「やっぱりですか。今度はなんですか？」

「うーん、じ、実はのう……、京介君には女子校に入ってほしいのじゃ」

……いや、立場的にある程度予想はしてたけどさ……、やっぱ実際に聞くとこいつ頭可笑しいんじゃないかって思う。

一応理由位は聞いといてやるか。

「元々変な頭でしたが遂に狂ってしまいましたか学園長？何故男を女子校に入れようなどと考えたんですか？」

……？可笑しいな、いつもなら笑って誤魔化す所なのに。

「これは冗談などではないんじゃ。理由も含めて話すとしよう……」

随分とマジだな……一体何が……？

「単刀直入に言うとしよう。京介君、

君が超・占事略決を使える事がばれた」

「……え〝？」

ばれた！？意味が解らない。今までずっとそんな話は聞かなかったしばれるようなことはしてないはず……。一体どうして……？

「落ち着いて聞いてくれ、まずばれたと言うのは適切ではない。正確には噂が広まっているのが現状じゃがな」

「噂って……、そんな突拍子に出て来るわけが……」

そうだ……。何も情報がない状態でそんな噂がでてくるはずがない。

「これは儂らの予想なんじゃが……、京介君、君は3年前の事を覚

えておるかね？」

「3年前……？それってもしかして大停電の日の……？」

「その通りじゃ。そして君は鬼を二体送り返したんじゃったな。おそらくはそれが原因じゃろう」

「ちょ、ちょっと待って下さい！あの時は俺と鬼以外いなかったはずです！誰もあの事を知ることは出来ないはずでは！？」

もし仮に味方が居たなら助けてくれるなりしてくれたはずだし、敵なら最後に気を失った俺を始末するだろうし……。

「確かに誰も居なかった……。じゃから犯人は……」

「犯人は……？」

「犯人は……君が送り返した鬼じゃ」

……いや矛盾してね？

「京介君の倒した鬼は死んだ訳ではないんじゃ。またいつか何処かの別の術者が呼び出す時もある、そうすれば再び現世に現れた鬼が情報を喋る可能性があると言うことじゃ」

「子爵級の悪魔ならともかく、普通の鬼の内の一体を狙って呼び出すことは出来ないからあの日の術者が再び呼び出して情報を得たとは考えにくい……。おそらく何処かで呼び出されて戦闘の最中に「お前と違って以前戦った奴でこんな奴がいた」とかそれを匂わせる事を言ったんだろう……。そしてその事に興味を持った者が調べていく内に噂が広まっていったと僕達は考えているんだ」

「途中経過は解らんが……、今では本気で超・占事略決が復活したと思っている者もおる。このまま黙っていれば時期に君の事を突き止める者も出て来るじゃろう……。」

「状況は把握しましたが……、それが何故俺を女子校に入れようという話になるんですか？」

「……実はかなり前から考えていたんじゃがのう……。」

そう言って学園長は自分の思惑を話始めた。

ネギや木乃香が大戦の英雄の子で意図的に俺と関わらせようとした

こと、そうする事で何とか俺を守っていこうとしたことを話してくれた。
大半は俺の予想道理だったが、守る対象に俺も入っていた事までは予想外だった。
もしかしたら後からとって付けただけかもしれないが二人の目を見る限り嘘ではないだろう……。
今でも学園長は打算的な人間だとまだ疑っていたがそんなことはなかったようだ。
原作でネギを教師にしたのもメガロなどのネギ達を利用しようとする組織から守るために仕方無くやったんだろう……。

「本当にすまなかった……、守ると言いながら結果的に君の事を利用する形になってしまって……。君達を守る方法はこれくらいしか思い付かなかったんじゃ……」

「別に俺は気にしていませんよ。ですがいつかネギや木乃香にはいつか必ず真実を話してあげて下さい……。それでこの話は終わりにしましょう」

「うむ、約束しよう。さっきの続きじゃが、君を最重要人物として正式に麻帆楽で保護する事にした」

「保護？」

「保護と言っても京介君の行動を制限する訳じゃないしから安心していいよ」

「今まで隠していた君の存在を麻帆楽の魔法使い達にばらしこれから本格的に組織の力を上げて守っていこうという訳なんじゃ。そうすれば下手に手を出す輩は出てこんじゃろう。君には男女共学化のテスト生として女子校に入ってもらいことになる。そうすれば嫌でも君は目立つことになるじゃろうから何か事件があった時に解りやすいからのう。このほうが色々と都合がいいんじゃ」

テスト生ねぇ……、いつかこうなるとは思ってたけどテンプレだな……、まぁ教師に成れって言われるよりはましか……。

「それにここ最近裏関係の男子生徒が極端に少なくてのう……。男子校で問題が起こった時対応できる人数がいないから昔のように共学にしたほうが問題の対応がしやすいと思い考え付いたのじゃ」

そういえば原作で男の魔法生徒は一度もでてこなかったな……。それなら確かに一纏めにしたほうがいいだろう。態々俺を女子校に入れるのもそういった事情が含まれてあるのだろう……。

「それでは京介君儂らも色々サポートするからこれから頑張るんじゃぞ」

てな感じだったな……。

あの時は何でもないと思ってたけどこれはキツイ……。
せめてもの救いは担任がタカミチということと幼なじみと同じクラスだということだ。

そんな感じで周りの視線に耐えていたらタカミチが教室に入って来た。

「はじめまして、今日から君達の担任になる高畑・T・タカミチだよ。これからよろしくね」

タカミチ助けてくれ。ストレスで胃が潰れちまう……。

「それじゃあまずは自己紹介からしていこうか」

タカミチィィィィィ！公開処刑とか止めてぇぇぇぇ！

しかも俺の名前、天野だからすぐじゃねーか！まだ心の準備が……。

そんな感じでテンパっているともう順番が回ってきた。

とりあえずさっさと終わらせよう。そう思い立ち上がる。

全員めっちゃ注目してる……。そりゃそうだ俺だけ男だもん。

朝倉なんかカメラ構えてるし、幽霊まで興味深そうに見てる。

下手なことは答えられないな……。なるだけ普通に……。

「はじめまして天野京介です」

クソッ！視線がキツイ……。駄目だ思考が上手く働かない。普通に……普通に……！

「以上です」

全員ずっこけた。

ああ……、やっちまった……。

番外編　その１（前書き）

今回の話は本編終了後のＩＦストーリーとなっております。
本編を楽しみにしていた方すいません。
少しネタバレを含むかもしれません。
それではどうぞ！

番外編　その１

ｓｉｄｅ京介

……うーん、ここは……何処だ……？
どうやらマンションの一室の様だが……なんでこんなところに？

確か俺はネギ達と魔法世界で始まりの魔法使いと戦ってそれで……
……どうなったんだ？
今一記憶が思い出せないな。

とりあえず今自分が置かれている状況を調べるとしよう。

服装は学生服か？しかし麻帆楽の制服ではないな……、なんでこんな服を着とるんだ俺は？

しかしどっかで見たことあるような……。

まあいい、服装は置いておこう。

次は身体だが……えーと、鏡、鏡と、あった……うん、ちゃんと俺自身の顔だ。どこも異常はないようだな。

後は……魔力と気は共に問題無し。超・占事略決も普通に使えそうだな。

最後にこの部屋を調べてみるか。なんか色々家具あるけど誰の部屋なんだ？

〜一時間後〜

「マジかよ……」

部屋を調べて最初に出てきた言葉がそれだった。

部屋というか着ていた学生服の胸ポケットに俺自身の学生証が出てきた。

当然というか何というか麻帆楽学園の所属では無かった。

まったく聞いたことのない名前の学校だ。

そしてこの部屋に置いてある家具に見覚えが無いものの中身は間違いなく俺の私物だった。

しかし本当にどうなっているんだ？夢でも見ているのだろうか……。

考えても仕方がない、とりあえず外に出てみるか。

外へ出てみるとそこには麻帆良学園に負けない位のきれいな街並みが広がっていた。

空には気球船が浮いている。何かの宣伝だろうか？

しっかし麻帆楽学園以外にこんな場所あったか？

いよいよ分からなくなってきたな……。

とりあえず私服に着替えてそこらへん歩いてみるか。

うーん、麻帆楽と同じくかなり技術の進んだ街だな……。むしろこっちの方が上と言えるだろう。

さっきの気球船もよくみたら映像流してたし、そこらで清掃の機会が徘徊しているのがその証拠だ。

技術が大幅に発達している事を除けば普通の現代日本だ。

それにしてもこの景色どっっっかで見たことあるような気がするんだが……あー駄目だ、全然思い出せん。

そんな感じでぶらついていると一つの集団が目に入った。

その集団はどうやら不良の様で彼等の少し先を必死の形相で走るツンツン頭の男がいた。

……今の奴、もしかして……。ということは……！

頭に一つの仮定が浮かんだ。今俺が置かれている状況を説明するにはそれしか考えられないな……。

って、考えてる場合じゃなかった！早く追わないと！

ｓｉｄｅ上条

「このクソガキがーーー！！！」

「止まれやゴラーー！！！」

「うるっせぇ！ぶん殴られねえだけ感謝しやがれ！！」

だーーーもう不幸だぁぁぁぁぁぁ！

折角の夏休みだってのについてねえ……。

子萌先生から補修を言い渡されるわ、ファミレスで頼んだラザニアも食う前にぶちまけられるわ、不良共と追いかけっこするはめになるわ散々だ畜生！

追いつかれないよう路地裏に入り込みそのまま走り抜ける。

「きゃあっ！？ナニアンタぁ！？」

「スっスミマセン！！」

丁度路地裏の出口をでたところにいちゃついているカップルがいたせいで驚かせてしまった。

「クソッどこもかしこもカップルだらけだぜ。さすが日付が変われば夏休み…」

彼女いない歴＝年齢の俺からしたら羨ましいかぎりですよ……。

ガッ

「おぉお！？」

よそ見をしていたせいかゴミ箱に引っかかって派手に倒れてしまった。

その拍子にゴミをぶちまけてしまいゴミまみれになってしまう。

＜警告！警告！ゴミのポイ捨てはやめましょう！＞

「いたぞ！こっちだ！」

「そこ動くなよ――――――」

警備ロボが騒いだせいで不良達まで来た！？捕まってたまるかっ！！

ううう、不幸だ。

きっと七月十九日が悪いんだっ！

なんであそこで手ぇ出しちまったんだろなあ……。ほっときゃよかったのに……。

そんな後悔をしながらも私こと上条当麻は逃げ足を止めるような愚かな真似はしない。さっきから全力疾走しているせいか少し疲れてきた。それでも後ろの不良達を振り切る事が出来ない。

逃げに逃げて橋を渡っている途中、橋の真ん中辺りに差し掛かった時だった。

「やっべ！」

あろうことか足元の空き缶に気づかずすっ転んじまった！

そのせいで不良たちに追いつかれ囲まれてしまう。

「ようやく捕まえたぜ」

「覚悟はできてんだろうな？」

やべぇ、絶体絶命じゃねえか……。

諦めかけたその時だった。

「ちっちぇえな」

その声は今俺と不良たちが来た方向から聞こえてきた。

「たった一人相手にそんな大人数で囲んで、お前らにプライドとかないのか？」

「なんだテメーは？このガキの仲間か？」

「もしそうなら一緒にケジメつけてもらわねーとなぁ」

「よく言うぜナンパに失敗したのはお前らの自業自得だろーが、見苦しいことこの上ないぞ？」

そう言ってソイツは不良達を挑発する。その手にはここへ来る途中で拾ったのだろうか鉄パイプが握られている。

「テメエ…この人数相手に勝てると思っｔ「思う」んのか……」

言い終わる前に断言しやがった！？相当自信ありそうだなアイツ……。

「テメエ……ぜってぇぶっ殺してやる……！」

不良の内５人が殴りかかっていく。するとアイツは持っていた鉄パイプを剣を使うかのように構えた。

一瞬だった

二、三度鉄パイプを振るったかと思えば不良達はすでに地面に倒れていた。

すげえ……超能力も使わずに勝っちまった……。

「ほらどうした？俺を殺すんじゃなかったのか？」

「……ッチィ！ならこれはどうだ！」

すると不良達のリーダーらしき人物が手から炎を出し始めた。

って、こいつ能力者だったのかよっ！！

「ははははは！どうだ俺はＬＥＶＥＬ２の発火能力者なんだよ！これでテメエも終わりだな。喰らえ！」

そう言ってサッカーボール程度の火の玉を投げつける。

だが……、

「ふんっ！！」

持っていた鉄パイプであっさり叩き落とされる。

……いやなんでさ！？

なんで叩き落とせるんだ！？鉄パイプなんて普通熱で溶ける　だろ！？

もしかしてこれがアイツの能力……？

不良達もまさか鉄パイプで消されるとは思っていなかったらしく完全に腰が引けていた。

「クソッおぼえてろよ！」

その言葉で不良達は皆逃げ出していった。

た、助かった……。

「大丈夫か？危なそうだったからつい助けちまったケド……」

「いや、ありがとう助かったよ」

不良達に囲まれた時はどうなることかと思ったぜ……。不幸体質の上条さんにとっては日常茶飯事なんだけども……。

「そういえばさっきの火の玉を叩き落としたのってお前の能力か？あまり見たことのないような能力だったケド……」

「まあそんなところだ。あれは……！！」

そう言って鉄パイプを持ち説明しようとした瞬間そいつの前にいきなり電撃が走った。直観でヤバいとかんじたのか間一髪かわしたようだ。……ってこの電撃はもしや……。

「いきなり電撃とは随分過激な挨拶だな」

「へえ、不良のくせに良い反応するじゃない」

そこにいたのはいつも俺に突っかかってくるＬＥＶＥＬ５だった。

ｓｉｄｅ京介

薄々感づいてはいたが間違いないな……、ここはとある魔術の禁書目録の世界だ。
どうやらまた世界を移動したらしい。おそらく最終決戦の衝撃の所為だろう旧世界と魔法世界が繋がっているような状況だったからな……、どんな異常事態が起こっても不思議じゃない。

しかし禁書か……、原作なんて最後に読んだの１５年位前だから一番最初の部分を少しと主人公が幻想殺しって能力を持ってる事くらいしか覚えてないぞ？

これからどうすりゃいいんだ？

まあとりあえずそのことは置いといて……。

「いきなり電撃とは随分過激な挨拶だな」

まずは目の前の厄介ごとをなんとかしますか。つい主人公がピンチっぽかったから介入しちゃったけどまずかったかな？

それでこいつは確か……どんな奴かは忘れたけど物語のキーパーソンだったような気がする。

「へえ、不良のくせに良い反応するじゃない」

そいつは感心した様に言う。
不良？

「おい、不良ってもしかして俺のことか？」

「あんた以外に他に誰がいるのよ？」

こいつ完全に勘違いしてやがる……！！
大体俺のどこが不良に見えるんだ？
自分の恰好を確認してみる。
普通の私服……＋ちょこっと返り血の付いた鉄パイプ。

……そりゃ勘違いもするわ。

「ちょ、ちょっと待ってくれ俺は違「問答無用！！」うおお！？」

今度はさっきより強めの電撃を打ってきた。やるしかないのか……。

「O（オーバー・ソウル）・S・、S（スピリッド・オブ・レイン）・O・R！！」

即座に空気中の水分を媒介にO・S・を構築し攻撃を防ぐ。たとえ電気が相手でも不純物を一切含まなければ水でも絶縁体となりうる。

「あ、あんたまで防いだ……？」

防がれるとは思っていなかったのか彼女の顔が驚愕の顔に変わる。今まで防げるのは上条だと思っていたのだろう。そこへ俺の登場とくれば驚くのは当然と言えるだろう。

「一体何なのよあんた達！？学園都市の書庫にも載ってない……、何なのよその能力は！？とりあえずあんた！初対面なんだから名乗りなさい！！」

いきなりだな……。人に名前聞くならまず自分からって習わなかったのか？

名乗り……か。

「そうだな……俺の名前は天野京介。そんでもって能力名は……

……」

「霊魂武装（オーバーソウル）とでも名乗ろうか。」

こうして科学と魔術、さらにこの世界に存在しないはずのもう一つの能力（チカラ）の持ち主は出会った。
その時世界はどんな物語を紡ぐのか……全てはＩＦの話。

とある巫術の霊魂武装（オーバーソウル）

科学と魔術と巫術が出会う時、異説は始まる……。

番外編　その１（後書き）

続か……ない！！
作者はアニメと漫画しか見ていないので……。
次回は本編更新となります。

麻帆良傭兵部隊（前書き）

本編更新おまたせしました。

麻帆良傭兵部隊

ｓｉｄｅ京介

麻帆楽女子校に入学してから一週間が過ぎた……。最初の自己紹介の日の放課後は酷い目に会った。

～回想～

「えっと、天野京介君だよね？」

放課後になり早く帰ろうとしていたらいきなり話しかけられた。

「私朝倉和美って言うんだけど、幾つか質問させてもらっていいかな？」

「俺に質問？」

「いやほら、このクラス唯一の男子ってことで皆色々興味あるだろうしさ、もっと詳しく知りたいなーって」

「なんで男子なのに女子校に入学したの？」「出身地は？」「身長は？」「体重は？」「趣味は？」「メアド教えて！」「お前強いアルカ？」「実は男装してるだけ？」

朝倉の発言を切欠に皆どんどん質問してくる。
ていうかテスト生の説明して無いのかよ！？

結局この日俺はクラスメートから質問攻めにあって終わった。

今ではすっかりクラスに馴染んでしまった。

このクラスで俺の事を特別視する者はもういない。順応性早すぎるだろ……。そのお陰で過ごしやすくなったから俺としては助かったけど……。

とは言え例外はある。

桜咲刹那や龍宮真名といった裏の関係者からは警戒されているよう

だ。桜咲刹那からは少し敵意があるような視線だったが、よくあるSSのように突っかかってこないのは最低限学園長から説明を受けているからだろうか……。龍宮真名からは少なくとも敵意は感じない、警戒半分興味半分といった所だ。

古菲や長瀬楓からは武人としてなにか感じるものがあったのか薄々俺の実力には気づいているようで狩人の目をしていた。正直勘弁してほしい……。

そして一番問題なのが裏の世界のナマハゲことエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルである。

彼女は俺のことを新しい玩具でも見つけたかのような非常に興味深そうな視線を向けて来ている。まあそれも当然だろう。こんな問題児ばかりを集めたクラスに一人だけ男が混じっていたら何か特別な事情があると言っているようなものだ。

一応多くのSSでは転生者にとってエヴァは安全みたいなイメージがあるのだが楽観的に行動するのはまずいだろう。といっても俺の秘密は公開していくことになっているから間違いなく向こうから接触してくるだろう。そのときにどれだけうまく交渉を進められるかが鍵だな……。

ちなみに裏の中で春日美空だけは普通に話す仲です。

ｓｉｄｅ刹那

はぁ、このちゃん……。

私の名は桜咲刹那。京都出身の神鳴流剣士だ。
関西呪術協会の長の命により、このちゃ、ゲフンゲフン、もとい木乃香お嬢様の護衛の為この学園に入学した。

学園長の計らいでお嬢様と同じクラスになったのはいいが会っていきなり話し掛けられてしまった。
私の事を覚えてくれていたのが嬉しくてつい任務を忘れそうになってしまいそうだった。

裏の人間で、その上まともな人間でもない私と仲良くなってはお嬢様に危険が及ぶ。そう思いそっけない態度をとり突き放してしまった……。

木乃香お嬢様さえ幸せなら私はどれだけ辛いことでも耐えてみせる！

そう決意していたのだが……、
なんだ！あの男は！？この一週間見ていてわかったがあの男と木乃香お嬢様はかなり仲がいい。正直お嬢様につく悪い虫ではないかとこの一週間心中穏やかではなかった。

学園長に尋ねてみると小学生の頃から麻帆楽に通っていてお嬢様ともその頃から友達だというからお嬢様の力を狙う者ではないと聞いて一先ず安心したが。

だいたい何故女子校に一人男子がいるのだ？共学化のテスト生というがどうにも納得出来ない。

このクラスには裏の匂いのする者が何人かいる。それを考えるとおそらく彼も裏の関係者か、何か特別な事情を持つ生徒なのだろう……。

なんにせよ気を緩める事は出来ない。お嬢様は必ず私が護り抜いてみせる！！

今私は学園長室に向かっている。なんでも今後の麻帆良学園で行動するに当たって顔会わせをするのだとか。

「失礼します」

中に入ると学園長と高畑先生が待っていた。

学園長と長の計らいのお陰でこうして木乃香お嬢様の護衛として麻帆良にいられる。本当に感謝してもしきれない。

高畑先生はＡＡＡ所属の長と同じ大戦の英雄、学園長の片腕だけあってかなり頼もしい。広域指導員で麻帆良の治安はこの人によって守られているそうだ。

そしてもう一人、私のクラスメートが目に入った。

龍宮真名

クラスの中でも特に裏の匂いの濃い者だ。恐らくかなりの実戦経験があるのだろう……。

「よく来てくれたのう刹那君、今日は顔会わせじゃったんじゃが……、まだ最後の一人がきておらんのじゃ……。もう少し待っ『コンコン』っと、丁度来たようじゃの、入りなさい」

「失礼します」

そう言って入って来たのは女子校唯一の男子だった。

ｓｉｄｅ京介

「これで全員揃ったのう。それでは各自自己紹介してもらおうかの」

学園長から顔会わせと聞いてやって来たがもしかして面子はこれだけか……？てっきり全ての魔法生徒と魔法生徒に会うものだと思っていたんだが……。そういえば原作ではネギと刹那もあまり詳しく知らされていないみたいだったな……。そう考えると普通なのか……？

けど一体何の為に……？この問題はまた後でにしておくか。

「龍宮真名だ。麻帆良に来る前は海外で傭兵紛いの活動をしていた。何か依頼があれば受けてやる、ただし料金は弾んで貰うよ」

態々高い金取るっていうからには実力に相当自信があるのだろう……。何かあったら頼んでみるか。

「桜咲刹那。出身は京都……以上です」

随分態度が硬いな……。この頃ならこんなもんか？護衛の任務が始まったばかりだし、まだ警戒しているのだろう。

「天野京介だ。小学生の頃から麻帆良に通っている。テスト生として二人と同じクラスに配属された。これからよろしく」

今度は自己紹介でヘマはしなかった。あの後物凄く微妙な空気になったもんなぁ……。

「三人ともこれから三年間仲良くするようにの」

仲良くって言ってもこんなギスギスした空気でどう仲良くしろと？桜咲なんて俺の事少し睨んできてるんだぞ？

「それでは君達の仕事を説明するとしよう。タカミチ君」

そういえばいたねタカミチ。全く喋らないから殆ど空気だったぞ。

「はい。基本的に君達は魔法先生とは違い、非常勤という扱いになる。いつもは魔法先生達が警備しているけどたまに人手が足りなくなる事がある、そんな時に君達に仕事を依頼する形になる。仕事の種類は色々あるけど内容はその都度説明するよ」

「中には命の危険がある仕事もあるが……、それに関しては裏での仕事に就く以上割り切ってほしい」

「はい」「了解」「問題ありません」

「後、これは一応仕事だから給料もでるからね」

言われてみればそうだよな……、魔法使いって言っても給料なきゃ生活できるわけないし……。

ということは魔法先生は通常の先生の仕事と魔法先生の仕事の分割高の給料貰ってるってことか！？なんて羨まし……くないな。その分倍の仕事しなきゃならないんだから疲労も倍ってわけだ。それなんてワーカーホリック？

「一応今伝えるべきことはこれ位かな、なにか質問はあるかい？」

特に何も質問はなかったので黙っておく。

「ふむ、特に無いようじゃの。それではこの場は解散としようかの」

そのまま解散となり顔合わせ兼説明は終わり、なんとか何も問題を起こさず今日は終わった……。

「天野京介、お前と少し話がしたい」

かにおもえた。

麻帆良傭兵部隊（後書き）

最後のネタが分かる人はどれくらいいるでしょうか？

VS刹那（前書き）

戦闘シーンうまく書けているか不安です……。
後書きにアンケートがあります。

VS刹那

ｓｉｄｅ学園長

一先ず最初の顔会わせは無事に終わったのう……。

京介君もこれから裏で仕事をしていく内に多くのパイプを作って貰わねば、裏の味方を増やしていけば彼を狙う輩から守っていける。特に京介君と組ませたあの二人ならそんな個人の事情を理解してくれるじゃろうしな。

烏族の半妖と悪魔の半妖、この三人が互いに助け合ってくれればいいんじゃが……。

刹那君は少し問題が有りそうじゃな……。自分の護衛としての責任が強すぎて少し刺々しい感じがするのう……。

先程も京介君を睨んでおったしのう……。

三人共上手くやってくれればいいんじゃが……。

ｓｉｄｅ京介

やっぱりこうなったか……。

そう思い俺は喫茶店の席に腰を下ろす。

もう夕方なので店内は学校帰りの学生達で賑わっている。

「今結界を貼った、私達の会話は周りからは他愛ない雑談にしか聴こえないだろう」

「ああ、サンキュ」

しっかしなんでこうなったのかねぇ、まぁよくあるＳＳみたいにいきなり戦闘突入じゃないんだから良しとしよう。

「それで？話ってのはなんだ？」

と言っても予想はついてるが……。

「話とは私達のクラスの近衛木乃香お嬢様の事だ」

まぁそれしか無いだろうな。

「木乃香がどうかしたのか？それとお嬢様と言うのは？」

「お前も既に気付いているだろうが、木乃香お嬢様はその身に莫大な魔力を宿している。木乃香お嬢様を使い利用しようという者から御守りするのが私の使命だ」

関西呪術協会の名前は出してこないか……。一応敵対組織にいる訳だから余計な事を言って問題を起こしたくないのだろう。

「お前はお嬢様のご友人だそうだから言っておくが……」

「裏の事は話すなって言うんだろ？学園長から聞いてる」

「イヤ、それも有るが違う」

「？」

「もしお前が……、お嬢様の力を利用しようと考えることがあれば、私は一切容赦しないと思え……！」

そう殺気を滲ませながら警告してきた。

「……ああ、了解したよ」

やっぱり実戦経験が豊富な奴は殺気も強いな。俺にはまだここまで強いのは出せん。

これでとりあえず敵意は緩和されたかな……？

「そしてもう一つ……今から私と戦ってもらおうか」

どうやらそうでもなかったようだ……。

「それはまた……、なんでいきなり？」

「一応これから仕事で組む時があるかもしれん。お互いに実力を把握しておいて損はないはずだが？」

うむむ、理にかなっているな……。それだけが理由とも思えんが……。

「だったら何故俺だけなんだ？その理由なら龍宮真名も同じなんじ

ゃないのか？」

「彼女の力量は即戦力だろう、大体雰囲気で分かる。実績もあるしな……。だがお前は違う。確かに実力はそこそこ有りそうだが、実戦経験が無いだろう。いざというときに戦えないと困るからな、ちゃんと戦えるか確認したいからな」

……なるほどね。

つまりこう言いたい訳だ。

実戦経験の不足しているお前では前線に出ても足手まといになるんじゃないのか、と。

これには流石に少しカチンときた。

確かに実戦は一度しかないが、今までずっと必死に修行してきたんだ。それを否定されちゃ堪ったもんじゃない。

「ＯＫ、分かった、その勝負受けよう。但し今は無理だ。色々準備が必要だし、何より今手元に得物がないからな」

「ム、分かった。では今日の午後１１時に世界樹広場に来い。遅れるなよ」

「了解」

席を立ち、そのまま店を出ていく。
さて、どうやって戦おうか……。

今回の相手は神鳴流剣士、だったら俺の取る手は……。

時間は現在午後１０時５５分、麻帆良の生徒は殆ど寮生活なので門限のお陰か人を見ない。

そんなことを考えながら歩いていると目的の場所にたどり着く。

携帯の時計を確認すると丁度１１時になるところだった。

「指定時間丁度に来たな。５分前行動を心がけたらどうだ？」

「ちゃんと間に合ったんだから別に問題ないだろ？」

既に来ていた桜咲に軽い口調で返す。何故かその後ろには龍宮が居る。

「私も君の実力が見たくてね。観戦させてもらうよ」

お前もかいっ！別にいいけど……。

「んじゃ始めますか」

互いに定位置に立ち戦闘準備に入る。向こうは夕凪を取り出し構える。同じく俺も持って来た得物を構える。

「ほう、槍か……」

取り出したのは先端が三又になっていて2，３mほどの長さの槍である。

今まで刀剣類以外にもきっちり修行してきたのでかなりの種類の武器を扱える。

今回刀剣類を選らばなかったのには理由がある。幾ら小さな頃から修行してきたと言ってもそれは所詮我流に過ぎない。

本物の剣士相手には到底及ばないだろう。
ましてや今回の相手は名高い神鳴流剣士。そんな相手に同じ武器で挑んだら自殺行為に等しい。
ピリピリとした緊張感が辺りを包む。
来る！
「Ｏ．Ｓ、ｉｎ槍（ランス）」
次の瞬間刀が振るわれる。
俺はその場より少し前に出て迎撃する。だが向こうもこちらの武器が槍の時点で予想していたのだろう、焦ることなく冷静に躱されてしまった。
「離れろ！」
なぎ払いで次の太刀が来る前に目の前を思い切り払った、桜咲を引き離し距離を取る。
たった一回の攻防だけでも向こうのほうが技量が上だと分かる。
だが武器の強化に関しては俺のほうが大幅に勝っていることが分かる。おそらく今あっさり離れたのもそれを感じ取ったからだろう。
今まで武器を強化するレベルがどんな基準か分からなかったが、やはりかなり強いらしい。

向こうは一旦様子見か……なら、ここは臆さず攻める！！
瞬動で近づきつつ槍で突く。桜咲の剣の攻撃範囲に入らないように距離を取りつつ何度も突いていく……。
技では劣るが、このまま力でゴリ押しして一気に終わらせれば……！
そう思い攻撃を続けるが今一決定打にはならない。
一進一退の攻防が続くなか、俺はそんな焦りを感じていた。

「どうやらそこそこの実力はあるようだな。少々見くびっていたようだ、だがッ！」

桜咲の持つ夕凪に気が込められていくのが分かる。ってやばい！

「終わりだ！斬岩剣ッ！」

今までの攻撃とは段違いの威力の斬撃が迫る。今までの様に槍で受け止められないだろう。かといって避けられる距離でもない。
だったら……！

振り下ろされる刀に対して槍を構える。真正面から受け止めず、斜めに受け威力を軽減し身体全体を使い受け流していく……、そしてそのまま勢いを利用して夕凪を弾き飛ばす。

ふもんとんこうで受け流しの技術は磨いている。お陰で上手くいった。

「ぐぅ！？」

「よし！」

武器を失い苦悶の声を漏らすも、まだその目から闘志は消えていなかった。

「まだ、甘いッ！！」

ガキン

武器を弾き飛ばした後の隙を突かれ手元に蹴りを入れられこちらも武器を弾き飛ばされてしまう。

これでお互い条件は同じか……。

ふと見れば桜咲の口元が僅かに笑っていた。

なんで笑っている？

確かに自分の武器が手元にない以上、俺から武器を取り除く事に成

功したのは良い。だがお互い条件が同じになった以上まだ笑える所ではないはず……。

だったら何故……？

……！なるほどそういうことか。
ここが最後の勝負って訳だ。
そう思った瞬間に桜咲が動いた。
腰を落とし顎を目掛けて掌底が飛んでくる。

「がぁッ！？」

苦痛の呻きを上げて地面に倒れる。
そして立っていたのは桜咲ではなく俺だった。

「う……ん…私は……？」

勝敗が決してから5分くらいして桜咲の意識が戻った。

「私は……、負けたのか……？」

「ああ、俺の勝ちだ」

「そうか……教えてくれ最後に何をした？」

「簡単な事だよ桜咲、お前が天野に掌底を喰らわせようとした時にカウンターで鳩尾に拳が入ったんだよ」

「あれを見切ったと言うのか……」

「いや、あれは見切ったと言うよりある程度想定していた感じだったな……。そうだろ？」

「一応ある程度だけどな」

そうあの時俺にはある程度桜咲の行動が読めていた。桜咲の流派は神鳴流剣士、だが剣士だからと言って使う武器は刀だけではない。

神鳴流は武器を選ばないと言う言葉がある。

あくまで剣術中心なだけで徒手空拳や札、陰陽道などといった東洋呪術を駆使するいわば魔法剣士のようなものである。武器がない以上選択肢は限られてくる敵とあれだけ接近した状態で札や陰陽道を使おうとすればその隙を突かれてしまう……。つまりあの状況では徒手空拳しかなかった訳だ。いくら速くてもある程度の予想があれば対処するのは難しくない。

「（と言っても原作知識がなかったらやばかったな……）」

「はぁ……完全に私の負けという訳か……どうやら実力を見誤っていたようだ、すまなかった」

そう言って軽く頭を下げてきた。
これは一応認められたってことでいいんだろうか……？

「なかなかやるじゃないか、今度一緒に仕事をするときはよろしく頼むよ。天野クン」

「ああ、こっちこそよろしくな」

まだ二人とも硬さがとれないけどこれでなんとかやっていけるかな？

「ふむ、なかなか面白そうな新入りが入ってきたじゃないか」

どこかでフラグが立ったような気がした。

ＶＳ刹那（後書き）

この作品ではネギは主人公やアスナ達と同じ年齢のＴＳですが、フェイトと小太郎の性別と年齢をどうするか迷っています。
そこでそれぞれＴＳするかどうかと年齢をそのままか主人公達と同じにするか選んで下さい。

このアンケートは１１月３０日まで行います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1964u/

ネギまに転生！？

2011年10月10日03時22分発行